

四日市市内
戦争と死者に関わる碑及び施設
(2023)

中 島 久 恵

目 次

本書が対象とする四日市市域について	2 p
四日市における戦争と死者に関わる碑・施設の諸相 慰霊・追悼・記念（1878～2011）	3 p
四日市市内の戦争と死者に関わる碑及び施設一覧	25 p
四日市市内 戦争と死者に関わる碑及び施設（地図）	33 p
四日市市内 戦争と死者に関わる碑及び施設（地区別）	48 p
保々地区 49 p 下野地区 50 p 八郷地区 51 p 大矢知地区 53 p 富洲原地区 55 p 富田地区 56 p 羽津地区 60 p 橋北地区 64 p 海蔵地区 65 p 中部地区 69 p 常磐地区 72 p 四郷地区 74 p 小山田地区 77 p 水沢地区 78 p 川島地区 79 p 桜地区 81 p 神前地区 82 p 三重地区 84 p 県地区 87 p 日永地区 91 p 内部地区 95 p 塩浜地区 100 p 河原田地区 104 p 楠地区 106 p	
四日市における戦争と死者に関わる記事見出し一覧（1878～1950）	112 p
あとがき	119 p

本書が対象とする四日市市域について

本書では、2021 年 1 月現在の四日市の市域を対象に、明治以降の戦争と死者に関わる碑及び施設について紹介します。

四日市市は、1897 年（明治 30 年）8 月 1 日、三重郡四日市町（1889 年町制施行）が市制施行して四日市市となって以降、平成に至るまで、周辺地域との合併を繰り返しながら市域を拡張してきました。

そのため、明治以降の歴史を通観するには、その時代によって市域の範囲が異なりますが、2021 年現在の市域を前提に、四日市の歴史として取り上げました。

四日市市の市域の変遷は以下です。

四日市市ウェブサイト（2020 年 12 月閲覧）を基に作成

年 月	市域の変遷	当時の人口
1897（明治 30）年 8 月	市制施行	25,326 人
1930（昭和 5）年 1 月	海蔵、塩浜を合併	51,810 人
1941（昭和 16）年 2 月	富田、富州原、常磐、日永、羽津を合併	111,975 人
1943（昭和 18）年 9 月	四郷、内部を合併	121,994 人
1954（昭和 29）年 3 月 1954（昭和 29）年 7 月	小山田を合併 川島、神前、桜、三重、県、八郷、下野、大矢知、河原田を合併	168,319 人
1957（昭和 32）年 4 月	水沢、保々と三鈴村（大字南小松・鹿間・和無田・野田）の一部を合併	183,021 人
2005（平成 17）年 2 月	楠を合併	309,959 人

1889 年（明治 22 年）4 月 町制施行により発足した四日市町の区域。

三重郡四日市町（四日市比丘尼町・四日市西町・四日市久六町・四日市川原町・四日市南町・四日市北町・四日市堅町・四日市中町・四日市八幡町・四日市境町・四日市浜町・四日市北条町・四日市蔵町・四日市北納屋町・四日市中納屋町・四日市桶之町・四日市袋町・四日市南納屋町・四日市新町・四日市下新町・四日市四ツ谷新町・四日市中新町・四日市南新町・四日市上新町・四日市稲葉町・四日市高砂町）・浜田村・浜一色村および末永村の一部（鳥居町）・赤堀村の一部（字新正）

当時の人口 15,483 人

四日市における戦争と死者に関わる碑・施設の諸相 慰霊・追悼・記念（1878～2011）

中 島 久 恵

はじめに

本稿では、四日市に残る近代以降の戦争と死者に関わる碑などの調査から、明治、大正、昭和の戦争と死者を、家族や知人、地域社会はどのように受け止めてきたかを考える。

調査の方法は、市内の神社、寺院、学校、墓地、あるいは地図の記載、関係者の手記や情報から碑の存在が推定できる場所を訪れ、その種類や現状を確認、撮影した。また、新聞【註1】の記事を検索して、碑建立の背景や、現存していない碑について補った。碑の状態及び関連資料から建立時期を整理し、先行研究を参考に時代の流れを把握した上で、四日市の特徴的な事例を紹介したい。

戦争と死を、同時代の人びとがどのように受け止め、共有しようとし、そして表したかを考えるためには、多くの論点がある。「慰霊」「追悼」であれ「顕彰」「記念」であれ、その実施者、仕組み、宗教的根拠、神道と仏教が果たした役割など、時代や地域によって異なる部分もある。本来は家族や知人の死という私的な出来事が、戦争によってもたらされたことで新たな意味を付与されており、そもそも戦争をどうとらえるかという問題とも不可分である。そのため、地域に残された戦争と死者に関わる碑それぞれが、「慰霊」「追悼」「顕彰」「記念」のどの範疇に属し、どのような意味を持つのかを分類することは容易ではない。

そこで、戦争と死を地域社会はどのように受け止めたのかを、残された碑を手掛かりに、時代を追って考えることとする。

1 西南戦争と死者

(1) 大矢知村と 1878 年（明治 11）建立『殉難紀念之碑』

四日市市域で近代以降に建立され、現存が確認できた碑等の中で最も古いものは、1878 年（明治 11）4 月に建立された『殉難紀念之碑』である。

碑の正面上部に「殉難紀念之碑」とあり、その下に次のように記された【註 2】。

碑面所録徴兵十一名明治十年薩賊入肥後之際征討從軍皆戰没干田原坂山鹿等郷人欽其忠勇為設招魂之祭且欲建碑以記念属銘千余乃銘曰殉難肥山崇祀京城嗟赫忠勇耀我朝明西望悼死東顧賀榮建碑勒功永留芳名

刻まれた名前は、明治 10 年の從軍で戦死した伊坂町、東富田村、富田一色村、北山村、小牧村、中野村、羽津村、西福崎村、小島村の 11 名である。碑の撰并書は福井邁による。福井は鹿川と号し、詩や書画で著名【註 3】な一方で、明治 13 年には安濃郡長に就任している【註 4】。

「招魂之祭」は、4 月 21 日有志により執行されたという【註 5】。

『殉難紀念之碑』は、2014 年（平成 26）に旧大矢知村役場跡地に移設されるまでは、大矢知興讓小学校の西側にある大矢知観音山の頂上に残されていた。建立された場所については、建立当時の状況を確認できる資料が見当たらないが、1893 年（明治 26）4 月 18 日の『伊勢新聞』に、「朝明郡招魂祭の況 大矢知村観音山で執行」とあることから、当初より観音山に存在していたのではないかと考えられる。



観音山頂上の殉難紀念之碑

観音山の東に位置する大矢知興讓小学校は、小学校が建設される以前は忍藩の陣屋であった。1871 年（明治 4）より懲役場として使用されたが、1876 年（明治 9）の地租改正反対一揆で焼失し、1880 年（明治 13）に小学校が落成した【註 6】。

西南戦争従軍、招魂祭の実施と碑の建立は、そうした混乱の只中のことであった。

西南戦争の死者は、1877 年（明治 10）11 月 12 日に東京招魂社に合祀されている【註 7】。翌 11 年大矢知村に建立された碑は「殉難紀念之碑」であるが、碑の建立に際し、有志によって招魂祭が執行され、その後もたびたびおこなわれた。招魂祭は、歴史的に形成された陰陽道の祭祀、呪法であったが、幕末、維新期の混乱における殉難者とその後の戦没者のために招魂社が建立されるようになった。1869 年（明治 2）東京招魂社が創建され、その後 1879 年（明治 12）東京招魂社は靖国神社と改称された。また地方の招魂社は 1939 年（昭和 14）に護国神社と改称された。このように招魂社が、戦死者のための特別な場となっていく一方で、地方には「官祭」として認められていない招魂祭などもあり、その実態や性格は必ずしも明確ではないと指摘されている【註 8】。

それでは大矢知村で招魂祭を伴う碑が建立された場所は、どのように認識されていたのだろうか。

西南戦争の死者について招魂祭が執行された観音山とその周辺は、その後の戦争においても死者の慰霊や追悼に大きな役割を果たしてきた。

まず、観音山の側面には共同墓地があり、戦死者個人の墓も残されている。中でも古いものは、日露戦争の戦死者である『故陸軍歩兵一等卒勲八等□□銀次郎之碑』で、1904年（明治37）10月11日清国で戦死し、1907年（明治40）12月に建立された。

観音山の北東に隣接する大矢知興譲小学校では、1920年（大正9）、校庭に「戦病死者忠魂碑」が建立された【註9】。

1924年（大正13）4月7日には招魂祭と出征軍人慰安会が開催され、記念として西南戦争からシベリア出兵に至る従軍者を記録した冊子『護国のほまれ 西南之役・日清戦役ノ部』『護国のほまれ 日露戦役ノ部』『護国のほまれ 西比利亜出兵ノ部』が作成された。『護国のほまれ』3冊【註10】は、村会議員、在郷軍人会役員等によって作成され、大矢知村長の緒言がある。

この年の招魂祭は特に盛大であったようで、新聞も前日と翌日に大きく取り上げた。記事によると、午前9時から忠魂碑前で神仏両式の戦病死者招魂祭、10時には各務ヶ原飛行隊の飛行機数機が飛来し、機上から沿道に慰安会の宣伝ビラ2万枚を撒布した。第三師団長の講話、余興に煙火（はなび）、二輪加（にわか）大神楽、血染の連隊旗活動写真等が行われ、参加者は3千余名という【註11】。

『伊勢新聞』によると、この時の「招魂祭」は、観音山ではなく、「忠魂碑前」で行われたとのことであり、慰霊・追悼の場が観音山から小学校の忠魂碑へと移っていることがうかがわれる。実施されたのは「招魂祭」であり、観音山と小学校は近接しているとはいえ、場の移行は質的变化を表しているといえる。

（2）諏訪神社『招魂記念碑』落成の祭典 1887年（明治20）12月

1887年（明治20）10月、郡長の発意で、諏訪神社境内に三重郡招魂社を設立するため、費用として、郡内1万3千戸に対し2銭5厘を徴収する計画が報じられた【註12】。その後、諏訪神社に『招魂記念碑』が建設され、12月10日落成の「祭典」に際し、西南戦死者の遺族親戚等に神拝証が頒布された。碑は現存していないが、『伊勢新聞』が伝えるところによると、この記念碑落成の祭典は四日市十年祭として、三瀧川原に設けられた式場と、諏訪神社の接待所の両会場で開催される大がかりなものであった。三瀧川原では、三重県駐在官陸軍大尉井上映一郎、三重朝明郡長などが参加し、「諏訪神社祠官」の祭文朗読による神祭と「高田派僧侶総代」「大谷派僧侶総代」「本願寺派僧侶総代」の仏吊が、それぞれの式場において各互に行われた。煙花や角力もあり、川原から神社までの道には提灯が列をなし、来観人は数万と伝えられた。「四日市祭の賑ひより幾十倍なる哉実に筆紙に盡し難し」「四日市更始よりの賑ひなり」など、かなりの盛況であったことがわかる【註13】。

（３）『西南役戦死者藤井伊之吉君碑』 1896 年（明治 29） 11 月

羽津城跡に残る『西南役戦死者藤井伊之吉君碑』は、大矢知観音山の『殉難紀念之碑』に刻まれた西南役戦死者のうち、羽津出身の個人の碑である。明治十一年建立の『殉難紀念碑』と比べると、戦死者個人を顕彰する傾向が強く、また碑の様式も鋭角的な意匠が特徴的である。日清戦争後、戦死者を顕彰する個人の碑が多く建立されるが、この時期に西南戦争の個人碑が建立されたのは、そうした流れに沿うものであったと考えられる。



西南役戦死者藤井伊之吉君碑

2 日清戦争と死者

日清戦争においては、死者個人の業績を称え、顕彰する碑が次々と建立された。この時期の個人碑の特徴は、故人に縁のある者が有志となり建立が計画されていることにある。また、増加する戦病死者が注目されるにしたがって、神社と仏教界の確執が生じるようになっていった。

(1) 諏訪神社 『杉村僊之助之碑』 1896 年（明治 29）7 月

1894 年（明治 27）、日清戦争に従軍し病死した杉村僊之助の業績と、若くして亡くなったことを惜しみ長く後世に伝えること意図して建立された。撰は、伊勢山田の松田齊。

杉村は三重紡績会社の社員で、1889 年（明治 22）、大日本綿糸紡績同業連合会が農商務省の官吏とともにインドでおこなった綿花の調査に参加、技術長斉藤恒三の指示でインド綿花を買い付け、綿糸生産に成果を上げた【註 1 4】。その後、1894 年（明治 27）、日清戦争に従軍した。碑文によると、第三師団に所属し、12 月 26 日病死したという。

杉村の葬儀は 1895 年（明治 28）3 月 3 日、三滝川原において執行されることになり、『伊勢新聞』は葬儀について、僧侶 30 余名、高等官及三重、大坂、三軒屋の各紡績社員、孟買（ボンベイ）のタタ氏、ラルカカ氏、神戸の内外綿会社員、日清貿易会社員等も会葬する予定であること、また、雨天の時は真宗高田派の東漸寺で執行されると伝えた【註 1 5】。

また、三重紡績会社の技術長であった斎藤外 11 人が発起となり、碑が建立されることとなった【註 1 6】。葬儀は 1895 年（明治 28）3 月 3 日であったが、碑の建立計画は葬儀に先立って発表され、3 月 1 日には「故杉村氏記念碑 故杉村三等軍吏の記念碑建設に付已に千六百余円の寄付申込あり而して建設地は諏訪神社の由にて墓所は専修寺境内に定めたり」【註 1 7】と伝えられた。

現存する碑には、建立されたのは 1896 年（明治 29）7 月となっているが、その後 1902 年（明治 35）8 月に「故あって」諏訪神社に移されたと追記されており、移される前まではどこにあったのかがはっきりしない。『伊勢新聞』の報道では諏訪神社に建立の予定とされていたが、何らかの理由で実現しなかったことがうかがわれる。

詳細ははっきりしないが、この頃、注目される出来事として、諏訪神社の碑をめぐり地元僧侶との間で軋轢が生じていたことが報じられている。

明治 28 年 12 月 5 日『伊勢新聞』によると、古くは西南戦死者記念碑建設時から、僧侶が「奔走尽力せしに拘らず遂に四日市の諏訪神社境内に建設し殆んど神職の管轄に属したる姿なり」と不満が生じていたこと、加えて「今回戦勝記念碑建設に就ても当初三重郡僧侶にて発起したり然るに是亦尚武会にて発起する事となりたる」との苦情が出て、招魂祭に不参加の動きが起きているという

【註 1 8】。新たに問題となっている明治 28 年の「戦勝記念碑」がどのようなものかははっきりしないが、仏教界から不満が出るほどであったということは、碑が単に日清戦争の戦勝を記念するものではなく、戦病死者に関わるものである可能性は少なくないと考えられる。こうした神職と僧侶の争いは、四日市だけではなく、碑の建立や招魂祭などの追悼を神仏合同で実施する機会が増加するにしたがい、各地で頻発していることが指摘されている【註 1 9】。

（２） 南富田 薬師寺『征清戦死碑』 1896 年（明治 29）2 月

施主は、大字茂福中・寄付有志中で、発起人として「従軍者」の名前が記された。

『伊勢新聞』は、薬師寺門前に記念碑を建て、2 月 26 日後 1 時より建碑式をおこなったこと、式では、僧侶の読経、北島神官、伊藤村長、鈴木収入役の祭文朗読があり、学校生徒も参列したこと、式後は酒一樽を抜き祝意を表したと伝えた【註 20】。

建碑式では僧侶の読経と神官の祭文朗読が執行されているが、富田村の建碑が薬師寺門前であったことに注目しておきたい。この後、同地区には、『旌忠碑』（1906 年）『忠魂碑』（1915 年）『大東亜戦争殉国士慰霊塔』（1979 年）が建立された。現在これらは『征清戦死碑』と共に薬師寺門前に並んで残されている。移設された可能性もあるため、建立時にどこに建立されたかの確認が必要であるが、当該地区において、薬師寺が大きな役割を果たしていたことは間違いないと考えられる。

（３） 四郷 八王子『殉国者記念碑』 1896 年（明治 29）3 月

『伊勢新聞』によると、「日清戦役殉死者」2 名の功蹟を不朽に伝えるため、記念碑を建設し、3 月 29 日に建碑式がおこなわれたという【註 21】。

この時建立された碑は、後に八王子の吉田神社に移設された『殉国者記念碑』と思われる。碑文は大賀賢励で、朝明郡大鐘村の浄円寺住職で儒学者であった大賀は、忍藩の藩校の興譲館の教頭を務め、明治以降は真宗大谷派の教育にも携わった。

『ふるさと八王子 今と昔 歴史民俗文化遺産』【註 22】によると、碑は、以前は墓地にあり、1968 年（昭和 43）、団地造成による墓地の移転により、吉田神社に移されたという。

また、日清戦争後、その後の戦争の戦死者が追記されている。

（４） 日永 大宮神明社 『記念碑』 1898（明治 31）年 3 月

1894（明治 27）年、清国で戦死した日永村の田中光治郎の記念碑で、親族と有志によって建立されたことが記されている。撰は、第三師団歩兵第六聯隊第二中隊長歩兵大尉正七位勲六等功五級口羽清之助である。

『伊勢新聞』では、「虎山の役に奮戦敵口氏の胸部を貫通せしも屈せず暫く勇進せしが苦痛に耐へず吾事已むと劔を以て咽喉を貫き斃れしと云ふ猛卒」【註 23】と紹介され、1894 年（明治 27）12 月 10 日、日永村興正寺で葬儀が執行された。葬儀では日永尋常校生徒による演奏、郡長、村長、校長らの祭文が朗読され、三重・朝明両郡の僧侶、教員、生徒らが多数参加、50 本余りの旗が立てられ盛況であったという。

『記念碑』は、現在は東海道に面した大宮神明社の鳥居の南側横に位置し、通りから目立つ場所にある。建碑式は 1898 年（明治 31）4 月 29 日に行われ、三重郡長、日永村長、日永小学校長らの式辞と発起人総代の答辞、神官の祭文、興正寺住職の読経回向があった。式場付近では花角力（すも

う)が開催され盛況であったと伝えている。また、式終了後、神明社の拝殿で饗応があった【註24】とあり、碑が建立された場所は明示されていないが、大宮神明社であったのではないかと考えられる。

(5) 日永 西唱寺『記念碑』 1898年(明治31)12月

西唱寺の墓地に残されている陸軍歩兵二等兵小林徳蔵の記念碑である。発起人は村長をはじめ村の人びとで、遺族や有志により建立された。徳蔵は日清戦争に従軍し、1894年(明治27)11月、脚気で入院していた平壤の兵站病院で病死した。20歳であった。撰拝書は、三重郡の郡長を務めた柚原具致である。

日清戦争の戦死者の碑の中で、建立時の建立場所が確認できたのは南富田の薬師寺『征清戦死碑』、推定されるのは日永大宮神明社の『記念碑』であるが、『杉村僊之助之碑』(諏訪神社)、『殉国者記念碑』(吉田神社)、『記念碑』(西唱寺)については、最初に建立された場所を特定できなかった。

葬儀と墓は寺、碑は神社という役割分担の傾向が見られるが、墓地に建立されたと考えられる碑もある。また南富田の場合は、薬師寺が中心的な役割を担っていると考えられる。こうした地域事情もふまえ、碑が移設された可能性も考慮して、建立当時、碑はどこに設置されたか等経緯を確認することは重要であると考ええる。

3 日露戦争と死者

(1) 増加する「市葬」「村葬」報道

日露戦争期の動向で注目されるのは、葬儀を市葬や村葬とする報道が増加するようになったことである。

たとえば普蘭店で亡くなった伊藤軍曹の葬儀が、1904年(明治37)6月5日、三滝川原において「市葬」として仏式で行われ、その様子が詳細に報じられた。『伊勢新聞』によると、午前11時自宅より霊柩は市役所に移され、隣接の女学校が会葬者の休憩所に充てられた。白張提灯1対を先頭に生花8対、送旗16旗、市内の三尋常小学校并に高等小学校高等女学校の生徒、陸軍将校其他奏判任官、代議士、県会議員、市参事会員、市会議員、商業会議所議員其他名誉職員、各町総代、尚武会委員、籠花1基、伶人、市内各宗并に付近村の僧侶、銘旗、燈籠、霊柩(霊柩の前後左右は20余名の在郷軍人が警衛)燈籠、喪主(父)、市長、遺族、親戚、十建町、塩浜村会葬者、赤十字社員、四日市教育会員など会葬者は、4千余名。

午後2時、霊柩を式場に安置し奏楽がはじまると、市長が吊(弔)文を朗読し、次に市会議長、知事代理警部長、第三十三連隊補充連隊長代理少尉、津連隊区司令官代理曹長、三重軍人議会議長、同四

日市支部長、教育会副長の吊辞が続く、電吊等を助役が代読。次で中隊長、小隊長より贈られた吊書の朗読によって戦闘当時の様子を偲び、僧侶による勸行法の中、喪主、遺族、親族、市長をはじめ参加者の焼香後、市長が遺族、親族総代を伴って会葬者に挨拶し式を終えた。

また、当日市内は朝から各戸が吊旗を掲げて悼意を表し、式場の付近、南北の堤防等に集まった人は1万余名という【註25】。

この後、戦死者の市葬、村葬の報道が続く。

戦死者葬儀の性格を考える上で、この時期に増加する「公葬」については議論がある。

籠谷次郎氏は、葬儀費用など葬儀の執行と町村のかかわりが、明治期と昭和期では差異があることから、「町葬」「村葬」と表現していても、時代によってどのように変化したかをみていく必要があると指摘した【註26】。

また、荒川章二氏は、地域ぐるみの戦死者葬儀について、葬儀に関わる規程の成立、参加者、費用の徴収法、会場などについて分析し、日清戦争期に公葬が登場して基本となる形が形成され、日露戦争期には各地で葬儀規程が作られ、確立、定着していったこと、また葬儀関係者が「公葬」として自己認識していたことの重要性を指摘している【註27】。

日露戦争期の戦死者葬儀について、四日市でも「市葬」「村葬」という表現での報道が増加しており、記事からも、大規模な地域ぐるみであったことがうかがわれる。この頃、戦死者の葬儀が、より公的な意味を持つようになり、地域の人びとも特別な死と認識するようになっていったと思われる。

(2) 碑の建立

また、市内の寺院や地域の墓地に、日露戦争で戦死したことを伝える墓碑が残されているところもある。

日露戦争に関連しては、碑銘や様式が類似した『日露戦役記念碑』が複数残されていること、また、戦後、三重県警察部長が県下各警察署長に宛てた「忠霊塔忠魂碑等の措置について」(1946年)【註28】において、「忠霊塔」「忠魂碑」と並んで「日露戦争記念碑」が挙げられていることから、現存しているものは多くないが、同時期に各地で同様の碑が建立されたのではないかと考えられる【註29】。

この他に日露戦争の死者をきっかけに建立されたと考えられるものに、『忠勇義烈の碑』(桜神社)、『忠魂碑』(1908年 小古曾神社)、『表忠碑』(1911年 神前小学校横)、『表忠碑』(1921年 縣神社横)、『表忠碑』(室山町)、『日露戦役表忠碑』(1967年 足見田神社)、『表忠碑』(1906年 小松神社)、『表忠碑』(1918年 沙々貴神社跡)、『勇往敵愾』(1906年 南御見束神社)、『征露忠死碑』(1906年 羽津城跡)、『忠魂碑』(1910年 御園神社)があるが、移設、修復、建替られたと推測されるものもある。

(3) 日露戦争後の神道と仏教の動向

また、日露戦争後の動きとして注目されるのは、神道と仏教が、それぞれに戦争と死者を慰霊・追

悼する場を構築しようとしていたことである。

諏訪神社は、1906年（明治39）4月に、公園として保光苑を新設し、招魂祭（20日）、凱旋祝賀会（21日）、臨時諏訪神社大祭（22日）を行った【註30】。

20日は、午前には諏訪神社で招魂祭、午後には信光寺で追悼会が開催された。

『伊勢新聞』によれば、午前の招魂祭は、斎主生川鐵忠（諏訪神社宮司）、祭主尚武会長福井銑吉（市長）で、知事代理、連隊長代理他軍関係者、代議士、市内小学校・商業学校・女学校生徒、遺族、尚武会員、各町総代など参列者は数千人規模であった。午後の信光寺での追悼会も参列者は午前と同様で、追悼会終了後、浄土真宗本願寺派の島地黙雷の演説が予定された。また、当日、市内各戸は国旗提灯を掲げ、三滝川では昼夜90発の煙火が上がり、賑わったという。

日が異なるとはいえ、諏訪神社では招魂祭、凱旋祝賀会、臨時の大祭が連続しておこなわれており、戦死もまた、戦勝の一環であり、死は、戦争に勝利することによってこそ大きな意味を与えられた。

その後、諏訪神社の保光苑は市営公園となり（1908年）、御大典記念で図書館が建設される（1915年）など次々と整備されて、1916年諏訪公園と改称された。

また、1908年（明治41）には、「靖国神社遙拝式 6日に四日市尚武会が諏訪神社で挙行」【註31】と報じられ、県社であった諏訪神社において、日露戦争を契機として、靖国神社を核とした体制が地方でも構築されていったことがうかがわれる。

一方、仏教では、真宗三宗派が発起し、地元産業界の有力者伊藤伝七が会長となり政財界も協力して進められたのが忠魂殿の建設である。

明治1906年（39）9月、三滝川添い川原町千3百坪の土地を購入して、三十七八年役戦病死者のための忠魂殿を新築する計画が報じられた【註32】。翌明治40年には、4月従軍布教使佐藤巖英（浄土真宗本願寺派）の遊説、5月香月第三十三連隊長をはじめ将校一同と浄土真宗本願寺派からの寄付、7月地鎮祭執行、8月忠魂殿建設のため三重影功会を設立して会長に三重紡績の伊藤伝七、顧問に福井銑吉市長などが就任等、次々と伝えられ【註33】、仏教界も各宗派で建設協力に取り組んだ。しかし、42年には「忠魂殿の将来」として、不景気による資金難で計画を断念せざるを得なくなり「忠魂殿は完成の見込みなし」と報じられた【註34】。

このように四日市では、真宗の三宗派と地元経済界が協力して日露戦争に関わる忠魂殿の計画が進められたが、白川哲夫氏によると日清戦争をきっかけに浄土宗が全国各地に建立をすすめたのが「忠魂祠堂」であったという【註35】。1894年（明治27）、各地に忠魂祠堂を建設することが表明され、1896年（明治29）には建設が具体化していく。1898年（明治31）「忠魂祠堂二関スル事務規定」によると、「忠魂祠堂ハ阿弥陀仏ヲ本尊トシ専ラ、明治二十七、八年ノ役ニ依リ戦死又ハ病没者ノ忠魂ヲ奉祀ス」とされている。しかし、浄土宗単独の施設は、社会の反響を得るという点で十分ではなかったようで、早くも1900年には批判的意見が表われていたと指摘されている。

1906年（明治39）に発表された四日市の日露戦争戦病死者のための施設は、真宗三宗派の発起による「忠魂殿」であるが、建立の目的や、経済界との協力で計画が進められた背景には、こうした浄土宗の「忠魂祠堂」計画に影響を受け、その問題点を踏まえたものであったのではないかと考えられる。

4 太田覚眠と怨親平等・敵味方供養

戦争と死者、特に仏教と戦死者を考えるにあたってしばしば指摘されるのが、怨親平等と敵味方供養である。四日市では、太田覚眠が 1925 年（大正 14）に刊行した『露西亜物語』【註 36】の中で、怨親平等と敵味方供養について言及している。

太田覚眠は、四日市に生まれ、東京外国語学校露語科を卒業後、四日市市内法泉寺の住職となったが、1903 年（明治 36）、西本願寺の命でシベリア開教師としてウラジオストクに渡り、日露戦争、ロシア革命、シベリア出兵という激動の時代をロシアで過ごした。覚眠を一躍有名にしたのは、日露戦争時の日本人居留民救出である。戦争勃発による帰国命令が下る中、取り残された奥地の居留民 800 人を連れてウラル山脈を越え、ドイツを経て、12 月長崎に寄港した。この出来事は、全国の新聞で報じられ、覚眠自身もロシアでの体験を、国内の講演会や執筆活動を通して日本人に伝えた。

覚眠によるとシベリア派遣の際に、浦潮本願寺は戦病死者の回向供養を行い、墓地内に忠魂碑を建立し、本願寺と居留民会により招魂祭が毎年執行されたという。『露西亜物語』には、こうした碑をめぐる経緯と共に、覚眠が、この忠魂碑をめぐって、日本とロシアの戦死者を同様に供養すべきと意見を述べたことが記されている。かつて薩摩の島津弘義父子が、高野山に建立した朝鮮人の供養塔に感銘を受けたこと、親鸞や日蓮が敵対する者のためにも祈ったことに触れながら、次のように述べた。

私は朝鮮役の碑の例を以て、宜しく敵味方双方の為めの忠魂碑として建立すべしと云ふ事を主張した。さすれば此碑が日露親善の一媒介と成るだらうと云つたが、軍事費の中には敵の為に忠魂碑を立てる金は無いと云ふ事で、薩摩守の真似は出来ないのである。外交と云ひ軍事と云ひ随分窮屈千萬なものだと私は思つた。（『露西亜物語』）

怨親平等・敵味方供養の系譜は、戦争死者供養と仏教の関わりを考える際に、しばしば注目されてきたが、日露戦争期を山場として、その後下火となっており、その影響は限定的との指摘もある【註 37】。

覚眠の怨親平等・敵味方供養の主張が、当時、地元四日市の人びとにどの程度の影響を与えることができたのかは不明であるが、ここでは、シベリアに出兵した兵士とも深くかかわった浦潮本願寺の僧侶が、怨親平等・敵味方供養を主張していたことに注目しておきたい。

5 昭和の戦争と死者

昭和の戦争と死者に関わる碑は、そのほとんどが戦後に建立されたものである。昭和の戦争死者が記された碑の中には、日清戦争や日露戦争の記念碑など、すでに建立されていたものに追記したと考えられるものもある。こうした追記がいつおこなわれたかについてははっきりしないものが多いものの、戦後のことと推測される。

戦前から続く共同墓地のほとんどで、戦争で亡くなった人の墓が残されており、戦後、合同で墓を建立し、戦死者の墓であることを表示したり、墓に並んで「南無阿弥陀仏」などの碑を建立した地域もある。これらの墓碑等が、戦死者の追悼、顕彰、記憶にどのような役割を担っているのかについても重要であるが、今回の調査では、墓地の個人の墓については、戦死したことを意図的に示していると認められるものについても、基本的には墓であり、個人が調査で介入するのは難しいと考え取り上げなかった。墓地における戦死者の墓碑については、それぞれ地域の人びとによって大切にされ引き継がれ、しかるべく検証されることを願っている。

(1) 四日市と忠霊塔計画

昭和十年代の全国的な動向として注目されるのは、納骨堂としての忠霊塔の建立である。日中戦争の長期化で戦死者が増大し、各地で忠霊塔建設運動が広がった。1939年（昭和14）、財団法人大日本忠霊顕彰会が設立され、各市町村に原則として一基の建立をめざす忠霊塔建設運動が始まった。この忠霊塔建設には、当初より陸軍と仏教界が積極的に関わって進められたが、一方で、靖国神社―護国神社によって英霊奉斎を進める神道関係者からは強い懸念が示されたという。大日本忠霊顕彰会の発表によると、1942年10月1日現在、既設124基、近々完成予定140基、建設予定1500市町村となっていた【註38】。

四日市では、1943年（昭和18）に、忠霊塔建設計画が報じられた。報道によると、羽津山を第一候補として、高さ22メートル、工費10万円で建設することで話がすすめられていたという【註39】。

しかし、戦争が激化していくこの時期、四日市羽津山の忠霊塔の建設計画は実行されることはなかったと考えられる。実際全国的にも、1943年10月30日陸軍の「戦没者墓碑建設に関する件」によって、忠霊塔については「事実上その建設はストップ」し、「忠霊塔建設運動は失速した」と指摘されている【註40】。

(2) 戦争と死者の戦後

敗戦後、戦争に関わる碑の扱いについては、1946年11月1日に、「公葬等について」【註41】とする内務文部次官通達によって指示された。「忠霊塔・忠魂碑その他戦没者のための記念碑・銅像等の建設・並びに軍国主義者又は極端な国家主義者のためにそれらを建設することは、今後一切行

はないこと。現在建設中のものについては、直ちにその工事を中止すること。」とされ、すでに現存するもののうち、「学校及びその構内に存在するものは、これを撤去すること。」「公共の建造物及びその構内又は公共用地に存在するもので、明白に軍国主義的又は極端な国家主義的思想の宣伝鼓吹を目的とするものは、これを撤去すること。」としている。その上で、「戦没者等の遺族が私の記念碑・墓石等を建立することを禁止する趣旨ではない。」とされた。

その後、1951年には、戦没者の葬祭などについて、新たな通達が出された。「民主主義諸制度の確立による国内情勢の推移及び多数遺族の心情」を考慮して、慰霊祭、葬儀への知事、市町村長その他の公務員の列席や、地方公共団体による納骨施設の建設などが認められるようになった。そして「信教の自由を尊重すること、特定の宗教に公の支援を与えて政教分離の方針に反する結果とならないこと、軍国主義的及び極端な国家主義的思想の宣伝鼓吹にわたらないこと、並びに政治的運動に利用されないこと」が強調された【註42】。

（3）四日市と戦後

戦後建立された碑は多く、対象、設置年代、設置者、様式が多様化している。地域に残る慰霊碑等の把握や管理については、遺族会が一定の役割を担っているが、実際には、遺族会作成の一覧に掲載されず、遺族会が関与していないと考えられる碑等も少なくない。

戦後、最も早いものは、1947年（昭和22）、石原産業の捕虜収容所で収容中に亡くなった米軍とオランダ軍の兵士のために建立された『平和と自由のために第二次世界大戦で戦い、かつ死んだ人々に捧ぐ』と刻まれた碑である。

地域の戦死者の碑で戦後最も早い時期に建立されたのは、1948年（昭和23）年で伊坂町の『報恩碑』である。この時期には、『報恩碑』『俱會一處』『戦没者之碑』『南無阿弥陀佛』といった碑銘が並ぶ中で、1950年、上海老町の共同墓地に建立された碑には『英霊之碑』と刻まれている。しかし、その形状は碑というよりも、むしろ墓石そのものである。三重県では、1946年12月13日、三重県警察部長から県内の各警察署長に対し「忠霊塔忠魂碑等の措置について」【註43】とする通達が発せられた。この中で、墓石については「遺族が合同して墓石を建立しようとする場合、その構造が華美壮大となつては戦争礼讃の弊を生じ易いので、簡素を旨とするよう指導すること」「戦没軍人に対して遺族の新設する墓標は、死者の戦功を顕彰せざる範囲内に於て、陸海軍人、官等級、氏名、戦死場所を刻ましむるも支障ない」と指摘されており、占領下においても、戦死者に対する慰霊・追悼が続けられていたことがうかがわれる。



上海老町 英霊之碑

1952年（昭和27）以降に新たにつくられた碑で注目されるのは、『平和之礎』碑で、確認できるものだけでも10地区で建立されている。「平和之礎」という表現は共通しているものの、建立者、建立時期、碑の大きさやかたちはさまざまである。そのため、特定の建設運動があったというよりは、それぞれの地域の人びとの創意で、自分たちの碑を建設したものと思われる。

四日市市域で最も古い『平和之礎』碑は、1953年4月に三重村【写真④】と昌栄町に建立された。三重村の『平和之礎』碑は三重小学校の校庭脇に建立され、同村の「大東亜戦戦没者」の名前が記されている。昌栄町に建立された碑は平成になってまもなく撤去され現在は残っていない。昌栄町の周辺住民からの聞き取りによると、個人の敷地内に建立された碑が老朽化して倒壊が懸念されるようになり、公的な移転先が検討されたが確保できず撤去されたという。

戦没者を平和の礎とする考え方は早い時期からみられるが、「平和之礎」という碑が、この時期に増加し始めた背景には、全国戦没者追悼式における吉田茂の式辞からの影響があるのではないかと考えられる。1952年5月2日、東京の新宿御苑で、初めて政府主催でおこなわれた全国戦没者追悼式において、吉田は、「戦争のため

祖国に殉ぜられた各位は、身をもって尊い平和の礎となり、民主日本の成長発展をのぞみ見らるるものと信じてうたがいませぬ。」と述べたという【註44】。

戦争、敗戦、占領の時代を抜け出て、独立と平和を得たと感じた時、親しい人々の犠牲を意味あるものとする「平和の礎」という言葉に、遺族の多くが惹きつけられたのであろう。



三重村 平和之礎

6 戦争に関わる様々な死

(1) 飛行訓練中の事故死

四日市の中心部を流れる海蔵川の南側堤防の下に、「靖博地蔵尊」と彫られた地蔵がある。建立年は不明だが、周辺住民の聞き取りでは、昭和20年代にはあったという。

戦争中の1944年(昭和19)1月21日、地蔵のある付近で、戦闘訓練中の九七式戦闘機2機が衝突して墜落、2名が亡くなる事故があった。この時亡くなった操縦士の1人が、林靖博陸軍大尉で、召集されて間もない明野陸軍飛行学校の北伊勢分教所(鈴鹿郡川崎村)の訓練生であった。

事故当時近所に住んでいた17歳の女性は、戦後の聞き取りで次のように語っている。



靖博地蔵尊

その日は何時ものように、私の家の前でたき火をしていました。(中略)「今日の飛行機はえらい長いこと飛んどるなあ、何処も行かんと」一人のお婆さんがそう言いました。皆も同時に「本当

やな」と言いました。その音は今まで聞いたことのない小さな音で、何処へも行かんと、上空高い、遠い所から聞こえてきました。皆はそのまま手仕事を続けました。ふと気が付くと先ほどの音がパタリと止んでいました。「おや」と思って私は上を見ました。とたんに小さな黒い点が円錐状にパーッと広がって地上に向かってきました。訳もわからずに「爆弾！」と言って家に飛び込みました。(中略)

人の噂話によれば、2機の練習機が衝突して、空中分解し、落下したのだということでした。私の家から西へ15～6分行った三滝川の堤防のそばに、洋風の会議所がありました。その前庭に、操縦士が機体の中に入ったまま墜落して死んでいたそうです。また、東の方へやはり15～6分行ったグラウンドに車輪が落ちていたそうです。また北へ20分くらい行った海蔵川の堤防近くに、操縦士が機体の中に入ったまま亡くなっておられたそうです【註45】。

『ふるさと橋北』【註46】によると、亡くなった林大尉は名古屋出身の27歳で、不憫に思った当時の有力者が発起し、婦人会などの協力を得て地蔵尊が建立され、その後しばらくは、毎年8月13日に、地元住民と遺族による供養の行事が続けられたという。遺族が出席できず行事はなくなった後も、清掃や前掛けの洗濯などは欠かさず行われ、地元の人びとによって大切にされていることがうかがわれる。

『明野陸軍飛行学校の歴史と飛行 第200戦隊戦史』【註47】では、この事故は次のように記録されている。

1月21日 18年度召集佐尉官(北伊勢教育中)独立飛行第五二中隊附陸軍大尉林靖博、九七式戦闘機操縦、同熊谷陸軍飛行学校附陸軍大尉片桐敏雄、九七式戦闘機を操縦は小隊空中戦闘訓練中、衝突し両機共、四日市海蔵橋付近に墜落兩名共殉職す

(2) 連合軍捕虜の死

1947年(昭和22)、石原産業四日市工場において、昭和19年から20年にかけて工場内の捕虜収容所で亡くなった連合軍兵士のための碑が建立された。『伊勢新聞』によると、4月6日、連合軍関係者が参列して建碑式が行われ、工場音楽部演奏の交響楽、第五空軍司令部教会P. S. コーディル中佐の祈祷、日本キリスト四日市教会日曜学校の奉聖歌唱などがあったという。

現存する碑には、建立年、建立者等の記載はなく、ただ以下のように刻まれている。



人がその仲間達のために命を捨てるほど崇高な愛はない。

平和と自由のために第二次世界大戦で戦い、かつ死んだ人々に捧ぐ。

Nothing is more sublime than to sacrifice ones own life for the sake of others.
This is dedicated to those who fought and died bravely in the name of peace
and freedom during World War II.

捕虜収容所の通訳であった瀬田栄之助の手記によると、この碑の建立を提案し実行したのは瀬田であったという。瀬田は、1953年（昭和28）発行の雑誌『話題』に、須上俊介の筆名で「日本にあった外国人捕虜収容所 ―一通譯の手記―」（115号）「内地における俘虜収容所の実態（続）」（116号）を發表し、「I産業株式会社四日市工場」の俘虜収容所のできごとを記している【註48】。それによると、戦後、連合軍による「戦犯調査が一段落ついた頃、私は収容所で他界した俘虜のために墓地の建設を思い立つた」という。瀬田はカトリック教徒で工場内の協力者と共に墓地を建設し、墓碑銘の草文を起草し「慰霊祭」を執り行った。瀬田は「墓地」としており、また現在碑の傍らに建てられた説明に「これは第二次大戦中に不幸にもこの地で死去した占領軍兵士の墓碑である。私たちは平和への熱望の花束でもって彼らの霊魂が永遠に安らかに眠れるようにしましょう。」（石原産業の説明では、碑は、伊勢湾台風後整備されたともいわれるが詳細は不明である）とあるように、この碑が墓碑なのか、「慰霊碑」なのかははっきりしない。亡くなったアメリカ人とオランダ人の遺骨は戦後母国に帰ったとされており（POW（Prisoner of War＝戦争捕虜）研究会 ウェブサイト）、「墓地」というよりは記念碑の要素が強いのではないかと考えられる。瀬田の手記について内容の検証は必要だが、碑の建立経緯を知る重要な資料といえよう。

石原産業（株）『創業三十五年を回顧して』【註49】によると、軍需工場に指定された石原産業には、労働力不足を補うため、特別に「捕虜」が配置された。フィリピンのコレヒドールや、シンガポールの戦線などで捕虜となった米、英、蘭、豪の兵士約600名が、1944年12月に割り当てられた。石原町住宅地の北部に収容所を設け、軍の監督下に作業に従事させたが、翌年4、5月から米機の空襲が頻繁となったため、6月にその半数を北陸地方へ転住させたという。

石原産業の捕虜収容所は、1944年8月11日、大阪俘虜収容所第17分所として開設され、その後、1945年4月6日、名古屋俘虜収容所に移管、第5分所となった。終戦時の収容人員は、296人（米196、蘭75、英25）で、収容中に亡くなったのは19人であった【註50】。

POW研究会作成の死亡俘虜リスト【註51】によると、亡くなった19人は、アメリカ人14名、イギリス人2名、オランダ人3名で、死因は急性肺炎や栄養失調、怪我などであった。英国人2名は、戦後横浜に設置された英連邦戦死者墓地に埋葬されたという。

（3）空襲

1945年（昭和20）6月18日未明、四日市はアメリカ軍の戦略爆撃機B二十九による空襲を受けた。およそ1時間にわたる爆撃の被害は、死者736名、重軽傷者1500名、行方不明63名、被災者47、153名といわれている。この後も8回の空襲があり、市街地は廃墟となった。

この空襲で亡くなった人を悼むため、全市的な殉難碑が建立されたのは、1980年（昭和55）のことである。市中心部の鵜の森公園に、『四日市空襲殉難碑』が建立され、名簿が保存された。以後、毎年6月18日に、碑の前で四日市空襲犠牲者慰霊献花式がおこなわれている。

空襲の被災地は近鉄四日市駅周辺の商業地を中心にした地域で、四日市空襲に関連して存在を確認できた碑は多くない。

被災の中心は海蔵川の南側であったが、川の北側の一部にも被害が及んでおり、海蔵川の北側にある唯福寺（阿倉川）と多度神社（三ツ谷町）に、戦災者に関わる碑が建立されている。

唯福寺には、1953 年（昭和 28）建立とされる『戦災者之碑』がある。建立の経緯は不明であるが、小さな碑の前には花立があり、この地域の戦災者のための特別な墓碑といえようか。

三ツ谷町の多度神社には、1965 年（昭和 40）『慰霊』と刻まれた碑が建立された。碑には「戦士之英霊」57 名と「戦災者之霊」3 名の名前が記されている。三ツ谷町は、6 月 18 日の空襲の被害地域としては北の端に位置しており、「戦災者」が「戦士」（戦没者）と共に慰霊されている稀有な碑である。

おわりに

戦争と死に関わる慰霊・追悼のあり方は、時代の影響を強く受けていることは言うまでもない。悉皆調査には程遠いが、四日市に残る戦争と死に関わる碑を調査し、この機会に報告をまとめようと思った理由は、この10年間の調査で感じた時代の変化にある。

長い戦後を得て、戦争の時代は遠くなり、昭和の戦争の証言者が不在となる時も近づいている。この調査の間にも、移築、改築、廃棄された碑が少なくなかった。また集合墓地の様相も変化している。

戦争と死者を日常的に意識しなければならない時代が必ずしも良いとは言えないが、かつて、この地域に起きたことを伝えていくことは大切である。残された碑や資料を手がかりとし、先行研究に導かれながら、地域の歴史と戦争を通観しておきたいと考えた。

四日市市域で最も古い碑は、1878年（明治11）建立の「殉難紀念之碑」（大矢知観音山）である。確認できた最も新しい碑は、2011年（平成23）建立の『平和之礎』碑（大治田）【写真⑦】である。これは、1955年（昭和30）河原田小学校前に河原田地区遺族会が建立した『平和之礎』を撤去し、場所を移して新たな碑を建立したものである。

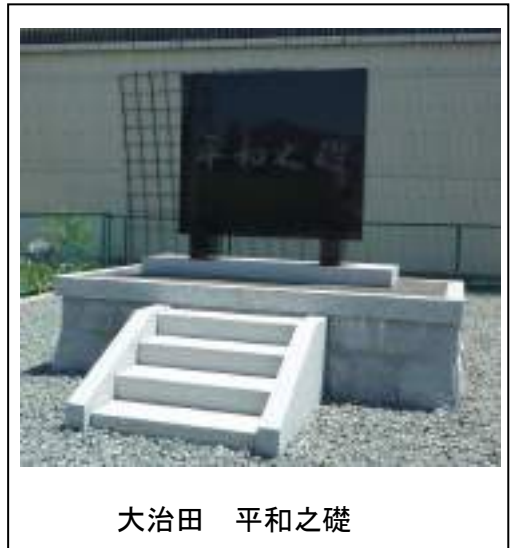
日清・日露と対外戦争に勝利を続けた日本は、戦死者を勝利の物語として享受してきた。明治以降、戦死者の慰霊としての招魂祭や招魂社、そして靖国神社、護国神社など神道の果たした役割は大きい。加えて、仏教も、日清戦争時から積極的に関わってきた。

たとえば山内小夜子氏は、真宗大谷派では、「日清戦争という、国民が初めて経験する外国との戦争に対する心構えを、法主は僧侶・門徒に向けて「御直命」として示し、その後も戦争の度に、「御直命」などが示されたこと、そして戦死は、「国のための死というものが、宗門の功績という形で表彰されるべき死、として意味づけられ、法要が勤められた」とし、「日清戦争の時の事例が、1945年まで、ほぼ同じ形で踏襲され継続され」と指摘している【註52】。

四日市では、すでに1887年（明治20）12月10日、西南戦争の戦死者について、三滝川原で「諏訪神社祠官」の祭文朗読による神祭とあわせて、「高田派僧侶総代」「大谷派僧侶総代」「本願寺派僧侶総代」の仏吊（弔）が行われている。この後、日清戦争以降の戦死者に対しても、真宗三宗派が、葬儀、追悼に大きく関わり、神道と仏教が、併存し、あるいは競い合いながら、それぞれの役割を果たしてきた。

そして迎えた1945年、明治以降、勝つことが前提であった日本の戦争観は、敗戦によって、どのように変わったのか。占領という直接的な影響と、勝利することができなかった戦争での死を、敗戦後の人びとはどのように受け止めたのだろうか。死者をどのように悼んだかとは、その死をもたらした戦争への評価と無関係ではない。

『三重県遺族会20年史』【註53】で、四日市市遺族会会長は、「戦時中は、誉の家、名誉の家、



大治田 平和之礎

出征軍人家族として、大きな誇りを持つたが敗戦により一変して戦没者遺家族となった。その上世論はきつかった、あだかも戦犯者の如く白い眼で視られ、文字通り肩身のせまい日日であつた」と述べている。敗戦という結果は、否応なく価値観の転換をもたらした。価値観の転換は、戦前の否定を伴い、敗戦で疲弊した日本社会は、戦死者に対する態度を一変させた。

四日市の遺族会は、1948年に結成され、1952年戦後初の戦没者追悼式を四日市市営グラウンドで開催、1958年（昭和33）には「平和の塔」の建立を総会で議決し、市長、市議会に請願、陳情を繰り返している。四日市遺族会会長他29名による「平和之塔建設促進について」【註54】では、「祖国のため尊い御柱となったわが郷土5600余柱を追悼記念し、四日市市中心地（市役所前四角）に平和之塔を建設いたしますことは、諸霊に応へる敬慕の途であり、ひいては道義の昂揚、平和日本の建設と、人類共存の福祉に、深く貢献するものであると確信する」と述べている。ここで注目しておきたいことは、この5600余柱とは、戦没者4900名と、四日市空襲で亡くなった700名を含むものであったと考えられることである。しかし、この時遺族会が求めた「平和之塔」は実現せず、戦没者のための『忠霊塔』が1966年（昭和41）、空襲被害者のための『四日市空襲殉難碑』が1980年（昭和55）に、それぞれ建立された【註55】。

四日市の戦没者の慰霊碑建設計画は1966年（昭和41）になって本格化する。

1960年頃より旧海軍燃料廠が所有していた泊山の国有地の払い下げと開発の計画が進められたが、そうした開発計画と連動して忠霊塔が建設された。この時、「平和之塔」ではなく、戦前に建設をめざした「忠霊塔」が再び注目された経緯は不明である。九鬼市長を会長とする四日市市戦没者忠霊塔建設委員会が結成され、建設委員会には、総連合自治会、婦人会、遺族会が参加した。建設計画は、昭和41年3月の定例議会で審議され、市からの補助3百万円を得て総予算850万円で、泊山公園の高台に建設されることとなった【註56】。

なお、この定例議会では、「靖国神社の国家護持に関する意見書」も可決されている。

同年8月15日、山手労働大臣、田中知事、九鬼市長、四日市遺族会などの関係者が出席して、完工式と慰霊祭がおこなわれた。忠霊塔は、高さ15メートルの鉄筋コンクリートみかげ石張りの塔で、「H型に組み合わせ“バンザイ”の形を表し」と伝えられた【註57】。対象となったのは日清戦争から太平洋戦争にかけ同市から出征、戦死した4965柱【註58】であった。

空襲で疲弊した四日市が戦後復興を果たし、さらなる開発を進める途上で、戦没者慰霊が靖国神社の国家護持と忠霊塔建設を両輪として再生された。万歳で示された復興と開発という勝利の物語の中で、かつて海軍燃料廠が所有した泊山に新たに建設された公園の頂上に忠霊塔は完成した。それは戦後の戦没者慰霊の頂点であったといえる。

敗戦、被占領、講和、復興という時代背景や、死者あるいは遺族の社会的立場や体験、記憶のゆらぎの中で、戦前と戦後の連続と非連続が絡み合いながら、戦争と死者はさまざまに語られ利用された。戦争を、どのように記録し伝えるのか、その答えは容易ではない。



泊山 忠霊塔

最後に、戦争の時代に勇ましい物語を伴い各地に建立された碑を巡りながら、気持ちが萎えてきた頃、出会った小さな碑について記しておきたい。



采女神社 おもいでのにしるべ

采女神社の入り口の片隅に、地域の公没者遺族会によって、1959年に建立された1メートル程の碑は、三重県遺族会の一覧表【註59】では「英霊碑」とされている。しかし実際の碑には、かな文字で『おもいでのにしるべ』【写真⑨】とのみ記され、58名の名前が刻まれているだけである。「英霊」の文脈で束ねられた一覧表からは知り得ない碑の姿に触れ、この碑に出会うため調査を続けてよかったと改めて思った。その刻まれた名前を読みながら、この小さな碑は、名前を刻まれた一人ひとりと、碑の建立に関わった有縁の生者が、死者の思い出に触れ、対話するための「しるべ」であったのだと感じた。

そして今、私は、かつてこの碑をしるべとして、思い思われた人びとのことを思っている。

註・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

註1 昭和20年代までは三重県立図書館及び津市立図書館のマイクロフィルムを利用して検索した。

註2 現存の碑は劣化しているため、判読難しい部分は、『伊勢新聞』（明治11年5月12日）に記載された碑文を参照した。

註3 浅野儀史『三重先賢傳』 玄玄荘 1934年（復刻 浅野松洞 東洋書院 1981年）

註4 『三重県安濃郡誌』安濃郡教育会編 1924年

註5 『伊勢新聞』明治11年5月12日付 「去月廿一日ヲ以朝明郡ノ有志者相会シテ招魂祭ヲ執行セリト」と伝えられた。

註6 大矢知興知興小学校ウェブサイト学校の沿革 2019年11月閲覧
http://www.yokkaichi.ed.jp/~ohyachi/cms2/htdocs/?page_id=76

註7 大原康男『忠魂碑の研究』暁書房 1984年

註8 白川哲夫「招魂社の役割と構造—京都の『戦没者慰霊』『戦没者慰霊』と近代日本 殉難者と護国神社の成立史」勉誠出版 2015年

註9 『伊勢新聞』大正9年4月1日付 大矢知村は小学校校庭に「戦病死者忠魂碑」を竣工し、4月4日に除幕式が行われた。

註10 入手した『護国のほまれ』3冊の複写資料に添付された説明書によると、原本は和綴本で、大矢知興知興小学校校庭の奉安庫に保存され、奉安庫撤去の際に発見されたものであったとのことである。

註11 『伊勢新聞』大正13年4月6日付・4月8日付

註12 『伊勢新聞』明治20年10月19日付

註13 『伊勢新聞』明治20年12月13日付

註14 『四日市市史 第18巻 通史編近代』 2000年

註15 『伊勢新聞』明治28年3月1日付

註16 『伊勢新聞』明治28年2月19日付

註17 『伊勢新聞』明治28年3月1日付

註18 『伊勢新聞』明治28年12月5日付

註19 たとえば藤田大誠氏は、「日清戦争を境に各地で『招魂祭』が盛んに行なわれるようになる中で、『神仏合同』で招魂祭を執行することが大勢となった。」「だが日露戦争以降、とりわけ神道人やその関係者の中から、徐々に神仏合同招魂祭や仏式公葬に対する反発が見られるようになり」と指摘している。「近代日本の招魂祭と公葬 神式と仏式との相克(第10部会特集第67回学術大会紀要)」『宗教研究』 2009年

また、白川哲夫氏は、「戦没者慰霊」をめぐり神仏対立が早い時期から起きていたとして、1900（明治33）年姫路の招魂祭において儀式的順番をめぐって僧侶と神官の間で対立が起きたことを紹介している。この後も、各地でしばしば同様の対立が起きているという。（「近代日本の『戦没者慰霊』行事—招魂祭・戦死者葬儀」『戦没者慰霊』と近代日本』勉誠出版）2015年

註20 『伊勢新聞』明治29年2月29日付

註21 『伊勢新聞』明治29年3月29日付

- 註22 四日市市八王子町自治会発行 2008年
- 註23 『伊勢新聞』明治27年12月14日付
- 註24 『伊勢新聞』明治31年5月1日付
- 註25 『伊勢新聞』明治三十七年六月七日付
- 註26 籠谷次郎「戦死者葬儀の時代変化 京都府久世郡宇治町の事例」『社会科学76号』2006年
- 註27 荒川章二「兵士が死んだ時―戦死者公葬の形成」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第147集)2008年
- 註28 『四日市市史 第14巻 史料編現代I』 四日市市 1996年
- 註29 栗津賢太「近代日本ナショナリズムにおける表象の変容」『記憶と追悼の宗教社会学』によると、埼玉県で、1904(明治37)年以降の7～8年間に寺社境内に建設の「日露戦役記念碑」「明治三十七八年戦役記念碑」が多く出願されているという。
- 註30 『伊勢新聞』明治39年4月21日付
- 註31 『伊勢新聞』明治41年5月7日付
- 註32 『伊勢新聞』明治39年9月16日付
- 註33 『伊勢新聞』明治40年5月2日・7月22日・8月13日・8月14日付
- 註34 『伊勢新聞』明治42年2月8日付
- 註35 白川哲夫「日清・日露戦争期の戦死者追弔行事と仏教界」『「戦没者慰霊」と近代日本 殉難者と護国神社の成立史』 勉誠出版 2015年
- 註36 太田覚眠『露西亜物語』丙午出版社 1925年
- 註37 藤田大誠「近代日本における『怨親平等』観の系譜」(特集 日本人の霊魂観と慰霊)明治聖徳記念学会紀要(44)2007年 なお、藤田氏は、松本郁子「日露戦争と仏教思想―乃木将軍と太田覚眠の邂逅をめぐって」に触れ、太田覚眠が「高麗陣敵味方供養碑」に影響を受けたことに言及している。
- 註38 大原康男『忠魂碑の研究』暁書房 1984年
- 註39 『伊勢新聞』昭和18年2月2日付
- 註40 川島智生「仮忠霊堂の建築位相」『陸軍墓地がかたる日本の戦争』ミネルヴァ書房 2006年 また、大原康男『忠魂碑の研究』によると、「戦歿者墓碑建設指導ニ関スル件」(陸軍普第一八六四号)で「国家総力ヲ拵ゲテ戦力増強生産拡充ニ結集スベキ現時局ニアリテハ墓碑建設ニ使用スル資材戦力ハ徹底的ニ節減スル」とされたという。
- 註41 文部科学省HP 2019年11月閲覧
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t19461101001/t19461101001.html
- 註42 文宗第51号・発総第476号 昭和26年9月10日 文部次官・引揚援護庁次長通達
 戦没者の葬祭などについて 文部科学省HP
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t19510910001/t19510910001.html
- 註43 『四日市市史 第14巻 史料編現代I』 四日市市 1996年
- 註44 『通信』第35号 1952年5月5日(田中伸尚他『遺族と戦後』岩波新書)
- 註45 「飛行機墜落の恐怖の記憶」語り 岡野艶子 聴き手 出口敦子(旧四日市を語る会『旧四日市を語る』第22集 2012年)
- 註46 橋北地区郷土史編集委員会『ふるさと橋北』 2013年

註47 「明野陸軍飛行学校の歴史と飛行第二〇〇戦隊戦史」編集委員会 編『明野陸軍飛行学校の歴史と飛行 第二〇〇戦隊戦史』 1979 年

註48 『話題』115号 『話題』116号 話題社 1953 年

志水雅明『戦場のファンタスティックシンフォニー 人道作家・瀬田栄之助の半生』（人間者 樹林者叢書 2017 年）に全文掲載されている。

註49 石原産業（株）社史編纂委員会『創業35年を回顧して』1956 年

註50 福林 徹 日本国内の捕虜収容所 4.全国の捕虜収容所一覧 POW（Prisoner of War＝戦争捕虜）研究会 ウェブサイトより

註51 名古屋第5分所（四日市）作成：POW 研究会

http://www.powresearch.jp/jp/pdf_j/powlist/nagoya/nagoya_5b_yokkaichi_j.pdf

註52 山内小夜子「真宗大谷派における戦死者儀礼の変遷」『現代宗教研究』第41号 日蓮宗宗務院 2006 年

註53 三重県遺族会 『三重県遺族会二十年史』 1969 年

註54 『四日市市史 第14巻 資料編現代I』 四日市市 1996 年

註55 「平和之塔」とする碑は、1961 年（昭和 36）傷痍軍人会によって、空襲で破壊された諏訪神社の「いくさの記念碑」を改修して建立された（中部日本新聞 中北勢版 昭和 36 年 4 月 7 日付）が、この碑がどのような性格のものであったかははっきりしない。なおこの『平和之塔』は、1977 年（昭和 52）に忠霊塔のある泊山公園に移設された。

註56 四日市市議会定例会会議録 昭和 41 年 3 月

註57 『中日新聞北勢版』 昭和 41 年 8 月 15 日付

註58 『三重県遺族会二十年史』（三重県遺族会 1969 年）によると、4969 柱となっているが、その後、忠霊塔の説明では「本市出身 4945 柱」とされている。平成 17 年四日市市と楠町の合併により、楠町の 242 人と合わせて 5187 人となった。

註59 三重県遺族会 顕彰施設紹介 （2019 年 11 月閲覧）

<http://www.za.ztv.ne.jp/mie-izokukai/gazou/2/index.htm>

四日市市内の戦争と死者に関わる碑及び施設一覧
(2009～2021調査 中島)

	祖霊社	1974(S49)年	殖栗神社(西村町)	保々
	慰霊塔	1957(S32)年	保々小学校	
	慰霊碑	1952(S27)年	下野中央保育園横 (朝明町)	下野
	忠勇義烈之碑		桜神社(山城)	
	報恩碑	1948(S23)年	伊坂町	八郷
	故陸軍歩兵上等兵 勲八等功七級 加藤金兵衛之碑	1906(M39)年	伊坂町	
	忠魂碑		八郷小学校	
	殉難記念之碑	1878(M11)年	大矢知村役場跡地(JA三重 四日市大矢知支店前) * 観音山より移転 (写真は観音山)	大矢知
	日清戦役従軍記念碑	1907(M40)年(『終 戦50周年三重県遺 族会記念史』による)	大矢知村役場跡地(JA三重 四日市大矢知支店前)	
	慰霊塔	1918年建立1952年 再建(『終戦50周年 三重県遺族会記念 史』による)	大矢知村役場跡地(JA三重 四日市大矢知支店前)	
	護国社	1955(S30)年 (『終戦50周年三重 県遺族会記念誌』 による)	天須賀3丁目	富洲原
	(位牌堂)	1953(S28)年 (『終戦50周年三重 県遺族会記念史』 による)	富洲原墓地	

	平和之礎	1998(H10)年	伊賀留我神社(茂福)	富田
	明治三十七八年戦役記念		鳥出神社(富田)	
	征清戦死碑	1896(M29)年	薬師寺(南富田)	
	旌忠碑	1906(M39)年	薬師寺(南富田)	
	忠魂碑	1915(T4)年 (『ふるさと富田』による)	薬師寺(南富田)	
	大東亜戦争殉国士慰霊塔	1979(S54)年	薬師寺(南富田)	
	(日露戦争戦死者の碑)	1914(T3)年	常照寺(茂福町)	
	殉国碑	1953(S28)年	別名霊園	羽津
	西南役戦死者 藤井伊之吉君碑	1896(M29)年	羽津城址(大宮町)	
	忠死者之碑	1901(M34)年 (『終戦50周年三重県遺族会記念史』による)	羽津城址(大宮町)	
	征露忠死碑	1906(M39)年	羽津城址(大宮町)	
	護国英霊碑	1954(S29)年	羽津城址(大宮町)	
	靖博地蔵尊		浜一色(2020年まで) 2021年仏性院(川原町)に移設	橋北

	護国神社	1962(S37)年	八幡神社(京町)	橋北
	故陸軍上等兵 小林大吉忠魂之碑	1942(S17)年	共同墓地(東阿倉川)	海蔵
	日露戦役記念碑	1907(M40)年	海蔵神社	
	平和塔(海蔵地区祈念碑)	1963(S38)年	海蔵神社	
	戦災者之碑	1953(S28)年	唯福寺(東阿倉川)	
	慰霊	1965(S40)年	多度神社(三ツ谷町)	
	平和之礎	1980(S55)年	野田神社(野田町)	
	杉村儼之助之碑	1896(M29)年	諏訪神社	中部
	四日市空襲殉難碑	1980(S55)年	鵜の森公園	
	表忠碑	2001(H13)年 (1909年建立の碑 を移設して建替)	常磐小学校横	常磐
	護国英霊碑	1954(S29)年	常磐小学校横	
	日露戦役記念碑	1906(M39)年	神明神社(東日野町)	四郷
	大東亜戦争 戦没者共同墓所		共同墓地(西日野町)	

	表忠碑	1953(S28)年	伊勢安国寺跡(西日野)	四郷
	表忠碑		室山町	
	殉国者記念碑	1896(M29)年	吉田神社(八王子町)	
	表忠碑	1964(S39)年	加富神社(山田町)	小山田
	日露戦役表忠碑	1967(S42)年	足見田神社(水沢町)	水沢
	出征之碑	1980(S55)年	愛宕神社(水沢町)	
	(表忠碑らしい)	1918(T7)年 (『終戦50周年三重 県遺族会記念史』 による)	沙々貴神社跡 (川島町歴明寺横)	川島
	忠魂碑	1906(M39)年	西福寺(川島町)	
	真実之利	1964(S39)年	西福寺墓地(川島町)	
	南無阿弥陀仏 (戦死者の集合墓地)	1953(S28)年	西勝寺(智積町)	桜
	忠魂殿		椿岸神社(智積町)	
	表忠碑	1911(M44)年	神前小学校横	神前
	平和之礎	1957(S32)年	神前小学校横	

	従軍記念碑	1896(M29)年	三重小学校	三重
	日露戦役記念碑	1908(M41)年	三重小学校	
	平和之礎	1953(S28)年	三重小学校	
	英霊之碑	1950(S25)年	共同墓地(上海老町)	県
	南無阿弥陀佛	1951(S26)年	共同墓地(下海老町)	
	戦没者之碑	1951(S26)年	共同墓地(赤水町)	
	表忠碑	1921(T10)年 (1951年追記)	縣神社横(平尾町)	
	南無阿弥陀仏		福泉寺墓地(平尾町)	
	忠魂碑	1976(S51)年	江村町集落センター横 (江村町子ども広場)	
	平和之礎	1955(S30)年	北野天満神社 (北野公会所)	
	記念碑	1898(M31)年	大宮神明社(日永)	日永
	表忠碑	1909(M42)年 (台の部分は1953年)	日永小学校横	
	記念碑	1898(M31)年	西唱寺(日永)	

	泊村戦没者碑	1954(S29)年	泊町公会所	日永
	忠霊塔	1966(S41)年	泊山	
	平和之塔	1961(S36)年	泊山	
	忠魂碑	1908(M41)年	小古曽神社	内部
	平和之礎	1961(S36)年	小古曽神社	
	慰霊碑	1977(S52)年	古市場墓地(采女町)	
	おもいでのにしるべ	1959(S34)年	八幡神社(采女町)	
	平和之礎	1962(S37)年	八幡神社(南小松町)	
	表忠碑	1906(M39)年	小松神社(北小松町)	
	故陸軍輜重輸卒 古市平吉君碑	1907(M40)年	小松神社(北小松町)	
	平和之礎	1955(S30)年	小松神社(北小松町)	
	俱會一處	1949(S24)年	上品寺(貝家町)	
	陸軍騎兵上等兵勲八等 種瀬幸吉碑	1907(M40)年	上品寺(貝家町)	

	釋堅忠勇送信士	1910(M43)年	了信寺(波木町)	内部
	故陸軍一等卒 北川栄吉君碑	1905(M38)年	金剛寺(馳出町)	塩浜
	卯野精忠君記念碑		御蔭神社(塩浜)	
	忠魂碑	1910年(M43)年 (碑に添えられた移設の説明による)	御蔭神社(塩浜)	
	平和之礎	1992(H4)年	御蔭神社(塩浜)	
	人がその仲間達のために 命を捨てるほど崇高な 愛はない。平和と自由の ために第二次世界大戦で 戦い、かつ死んだ人々に 捧ぐ	1947(S22)年	石原町	
	表忠碑	1914(T3)年	大治田3丁目	河原田
	平和之礎	2011(H23)年	大治田3丁目	
	平和之礎	1955(S30)年 (2011年撤去)	河原田小学校	
	報恩碑	1951(S26)年 (『終戦50周年三重 県遺族会記念史』 による)	楠町北一色	楠
	勇往敵愾	1906(M39)年 1950年移設追記	來教寺(楠町本郷)	
	殉国之碑	1958(S33)年	楠小学校	

	忠死記念碑口		楠郷総社神明社 (楠町北五味塚)	楠
	楠町靖国社	1955(S30)年(『終戦50周年三重県遺族会記念史』による)1982年移設	楠郷総社神明社 (楠町北五味塚)	
	勇往敵愾	1906(M39)年	南御見束神社 (楠町南五味塚)	
	忠魂碑	1968(S43)年	南御見束神社 (楠町南五味塚)	

四日市市内

戦争と死者に関わる碑及び施設（地図）

（国土地理院の地図を編集・加工）

■保々地区



- | | |
|-------|-----------|
| 1 祖霊社 | 殖栗神社（西村町） |
| 2 慰霊塔 | 保々小学校 |

■下野地区



- | | |
|----------|---------------|
| 1 慰霊碑 | 下野中央保育園横（朝明町） |
| 2 忠勇義烈之碑 | 桜神社（山城） |

■八郷



- 1 報恩碑 伊坂町
- 2 故陸軍歩兵上等兵勲八等功七級加藤金兵衛之碑 伊坂町
- 3 忠魂碑 八郷小学校

■大矢知



- 1 殉難記念之碑 大矢知村役場跡地（J A三重四日市大矢知支店前）
（1）殉難記念之碑 緑華山観音寺（観音山）
- 2 日清戦役従軍記念碑 大矢知村役場跡地（J A三重四日市大矢知支店前）
- 3 慰霊塔 大矢知村役場跡地（J A三重四日市大矢知支店前）

■富洲原



- 1 護国社 天須賀 3 丁目
- 2 位牌堂 富洲原墓地

■富田



- 1 平和之礎 伊賀留我神社 (茂福)
- 2 明治三十七八年戦役記念 鳥出神社 (富田)
- 3 征清戦死碑 薬師寺 (南富田)
- 4 旌忠碑 薬師寺 (南富田)
- 5 忠魂碑 薬師寺 (南富田)
- 6 大東亜戦争殉国士慰霊塔 薬師寺 (南富田)
- 7 (日露戦争戦死者の碑) 常照寺 (茂福町)

■羽津



- 1 殉国碑 別名霊園
- 2 西南役戦死者藤井伊之吉君碑 羽津城址 (大宮町)
- 3 忠死者之碑 羽津城址 (大宮町)
- 4 征露忠死碑 羽津城址 (大宮町)
- 5 護国英霊碑 羽津城址 (大宮町)

■橋北



- 1 靖博地藏尊 浜一色
- 2 護国神社 八幡神社 (京町)

■海蔵



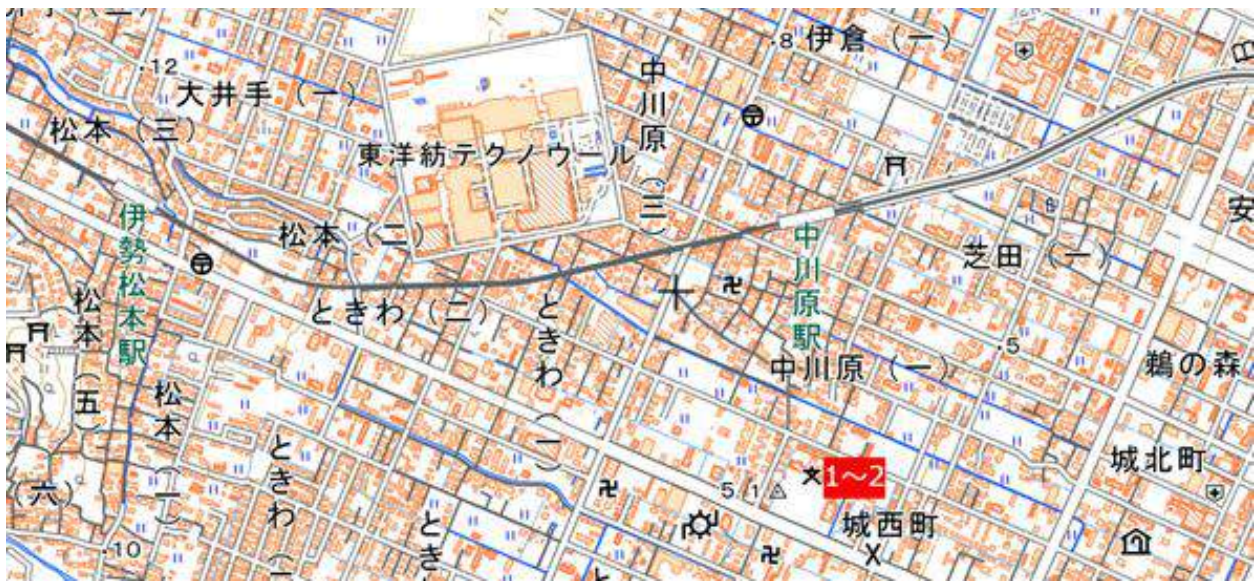
- 1 故陸軍上等兵小林大吉忠魂之碑 共同墓地（東阿倉川）
- 2 日露戦役記念碑 海蔵神社
- 3 平和塔(海蔵地区祈念碑) 海蔵神社
- 4 戦災者之碑 唯福寺（東阿倉川）
- 5 慰霊 多度神社（三ツ谷町）
- 6 平和之礎 野田神社（野田町）

■中部



- 1 杉村儼之助之碑 諏訪神社
- 2 四日市空襲殉難碑 鵜の森公園

■ 常磐



- 1 表忠碑 常磐小学校横
- 2 護国英霊碑 常磐小学校横

■ 四郷



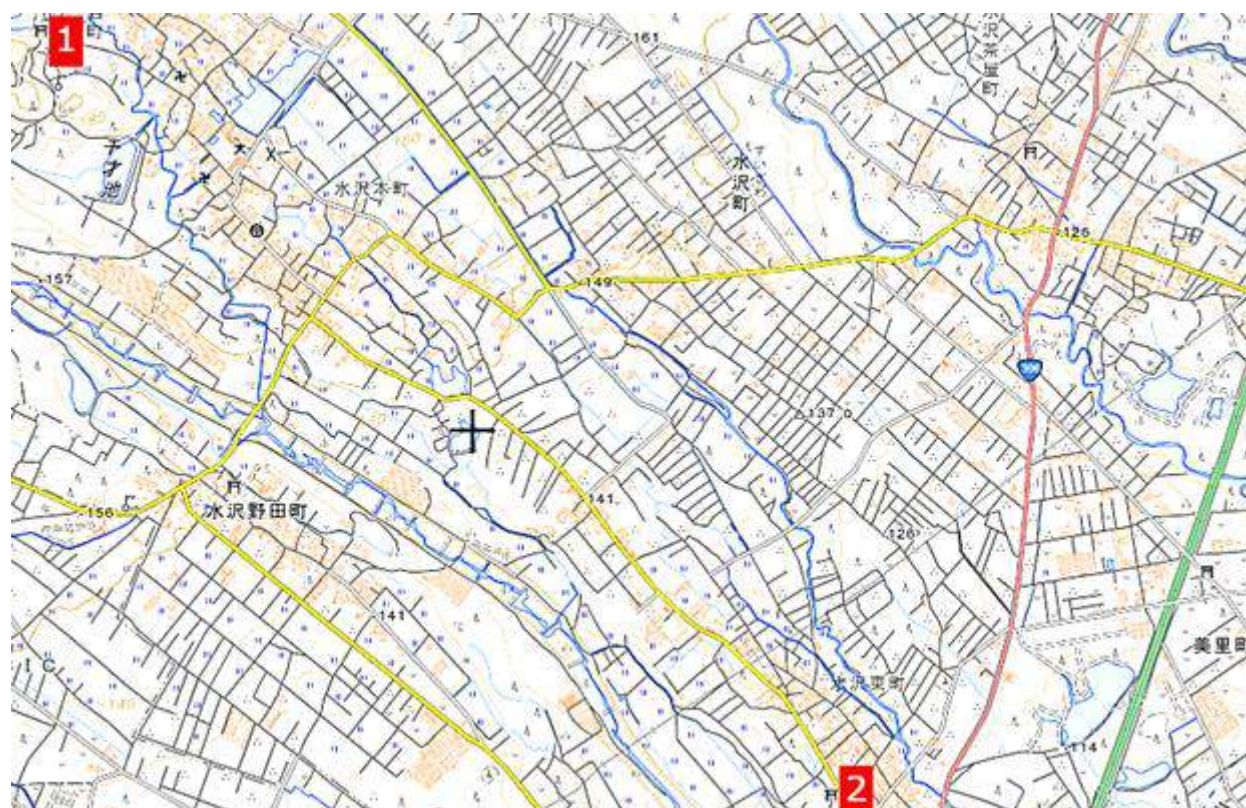
- 1 日露戦役記念碑 神明神社 (東日野町)
- 2 大東亜戦争戦没者共同墓所 共同墓地 (西日野町) ”
- 3 表忠碑 伊勢安国寺跡 (西日野町)
- 4 表忠碑 室山町
- 5 殉国者記念碑 吉田神社 (八王子町)

■小山田



1 表忠碑 加富神社（山田町）

■水沢



1 日露戦役表忠碑 足見田神社（水沢町）

2 出征之碑 愛宕神社（水沢町）

■川島



- 1 (表忠碑らしい) 沙々貴神社跡 (川島町歴明寺横)
- 2 忠魂碑 西福寺 (川島町)
- 3 真実之利 西福寺墓地 (川島町)

■桜



- 1 南無阿弥陀仏 (戦死者の集合墓地) 西勝寺 (智積町)
- 2 忠魂殿 椿岸神社 (智積町)

■神前



- 1 表忠碑 神前小学校横
- 2 平和之礎 神前小学校横

■三重



- 1 従軍記念碑 三重小学校
- 2 日露戦役記念碑 三重小学校
- 3 平和之礎 三重小学校

■ 県



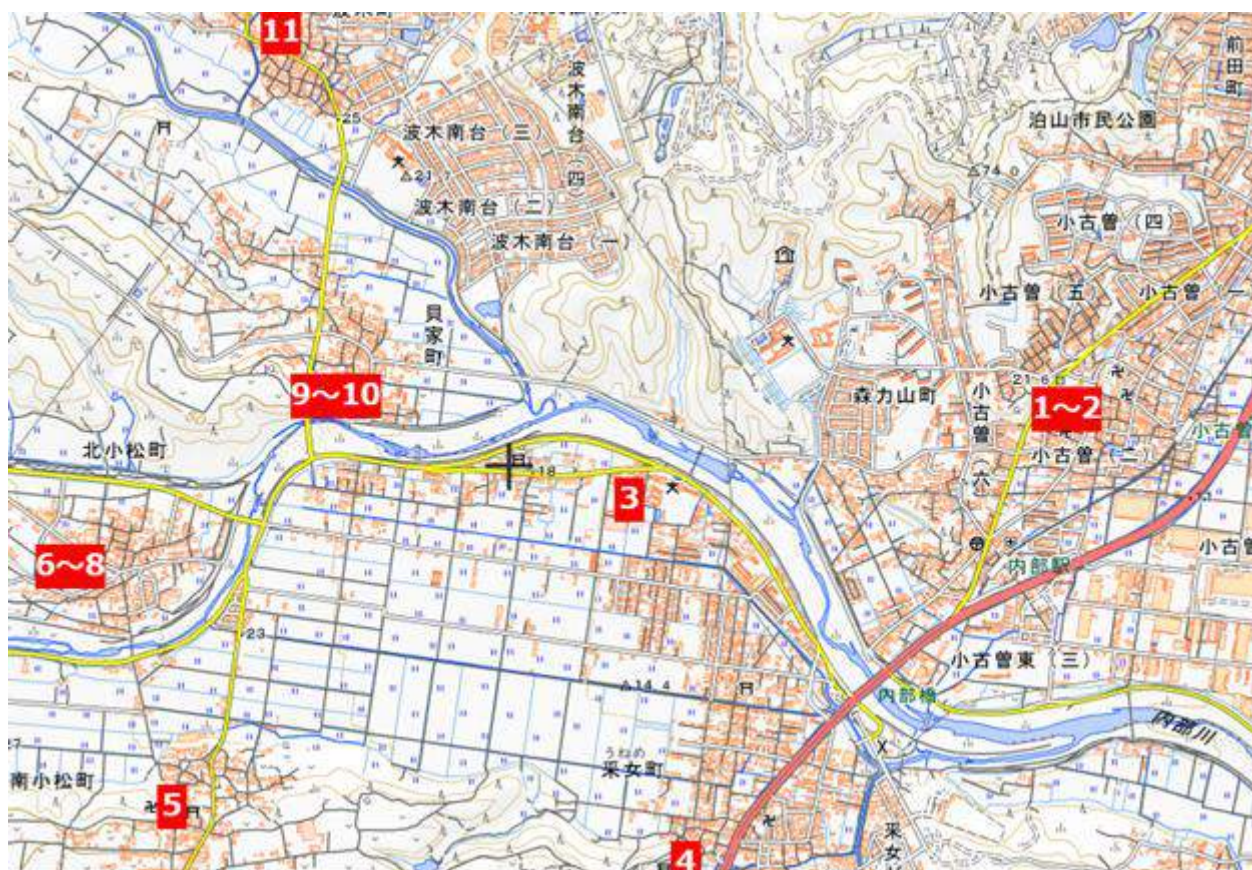
- 1 英霊之碑 共同墓地（上海老町）
- 2 南無阿弥陀佛 共同墓地（下海老町）
- 3 戦没者之碑 共同墓地（赤水町）
- 4 表忠碑 縣神社横（平尾町）
- 5 南無阿弥陀仏 福泉寺墓地（平尾町）
- 6 忠魂碑 江村町集落センター横（江村町子ども広場）
- 7 平和之礎 北野天満神社（北野公会所）

■日永



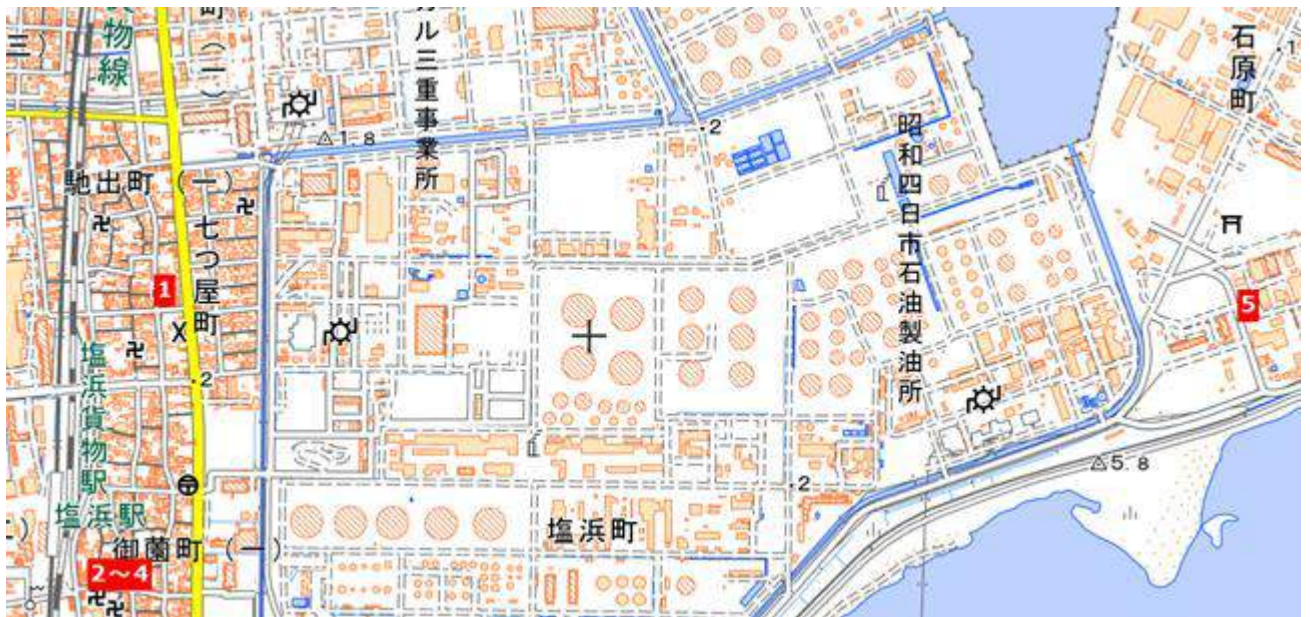
- 1 記念碑 大宮神明社（日永）
- 2 表忠碑 日永小学校横
- 3 記念碑 西唱寺（日永）
- 4 泊村戦没者碑 泊町公会所
- 5 忠霊塔 泊山
- 6 平和之塔 泊山

■内部



- 1 忠魂碑 小古曾神社
- 2 平和之礎 小古曾神社
- 3 慰霊碑 古市場墓地 (采女町)
- 4 おもいでのにしるべ 八幡神社 (采女町)
- 5 平和之礎 八幡神社 (南小松町)
- 6 表忠碑 小松神社 (北小松町)
- 7 故陸軍輜重輸卒 古市平吉君碑 小松神社 (北小松町)
- 8 平和之礎 小松神社 (北小松町)
- 9 俱會一處 上品寺 (貝家町)
- 10 陸軍騎兵上等兵勲八等 種瀬幸吉碑 上品寺 (貝家町)
- 11 釋堅忠勇送信士 了信寺 (波木町)

■塩浜



- 1 故陸軍一等卒北川栄吉君碑 金剛寺（馳出町）
- 2 卯野精忠君記念碑 御蔭神社（塩浜）
- 3 忠魂碑 御蔭神社（塩浜）
- 4 平和之礎 御蔭神社（塩浜）
- 5 人がその仲間達のために命を捨てるほど崇高な愛はない
平和と自由のために第二次世界大戦で戦い、かつ死んだ人々に捧ぐ 石原町

■河原田



- 1 表忠碑 大治田 3 丁目
- 2 平和之礎 大治田 3 丁目
（2）平和之礎 河原田小学校

■ 楠



- 1 報恩碑 楠町北一色
- 2 勇往敵愾 來教寺（楠町本郷）
- 3 殉国之碑 楠小学校
- 4 忠死紀念碑 楠郷総社神明社（楠町北五味塚）
- 5 楠町靖国社 楠郷総社神明社（楠町北五味塚）
- 6 勇往敵愾 南御見束神社（楠町南五味塚）
- 7 忠魂碑 南御見束神社（楠町南五味塚）

四日市市内

戦争と死者に関わる碑及び施設（地区別）

使用した写真は、すべて中島が撮影しました。

背景などが写り込んだ部分について、修正したことがわかるように加工したものが
あります。

■ 1 祖霊社 殖栗神社（西村町）



1974年3月吉日 建立

保々遺族会

祖霊社を示す石柱には「保々遺族会昭和四十九年三月吉日建之」とありますが、祠堂や狛犬については、建立が戦前であることが記されているものもあります。

『ふるさと保々』（保々歴史を語る会編集委員会）によると、「西南の役から大東亜戦争にいたる」戦死者193名が祀られているということです。

■ 2 慰霊塔 保々小学校



1957年3月10日 建立

「建碑発起 帝国在郷軍人会保々村分会」と記されています。

■ 1 慰霊碑 下野中央保育園横（朝明町）



1952年6月 建立

下野村

「三重県知事 青木理 書」と記されています。

■ 2 忠勇義烈之碑 桜神社（山城）



「第三師団長陸軍中将 従三位勲一等功二級 大久保春野書」と記されています。

（2013年5月14日撮影）

■ 1 報恩碑 伊坂町



1948年10月 建立
「水谷潔 書」と記されています。

「戦没者芳名」として、1940年10月から1945年3月までに戦死した17名の名前が刻まれています。

■ 2 故陸軍歩兵上等兵勲八等功七級加藤金兵衛之碑 伊坂町



1906（明治39）年7月 建立

1905（明治38）年7月に戦死したことが記されています。

■ 3 忠魂碑 八郷小学校



建立年不明

「陸軍中将渡辺章 書」と記されています。

裏に以下の戦没者を対象としたものであることが記されています。

明治二十七八年日清戦役戦没者 2 名

明治三十七八年日露戦役戦没者 1 1 名

大正七年起シベリア出兵戦没者 1 名

昭和十二年起日支事変戦没者 1 4 名

昭和十六年起大東亜戦争戦没者 1 0 9 名

■ 1 殉難記念之碑 大矢知村役場跡（J A 三重四日市大矢知支店前）

1878（明治11）年4月

明治以降長期にわたり、大矢知興譲小学校に隣接する緑華山観音寺（観音山）の山頂に残されていましたが、平成末期に、大矢知村役場跡地（JA 大矢知支店前）に移転されました。

大矢知村役場跡地（JA 大矢知支店前）の殉難記念碑
（2015 年撮影）

参考
p 4



観音山山頂の殉難記念碑（2013 年撮影）



明治10年の従軍で田原坂と山鹿において戦死した9村の11名の名前が、裏に記されています。

（伊坂村、東富田村、富田一色村、北山村、小牧村、中野村、羽津村、西福崎村、小島村）

朝明郡平津村・広永村・山村・伊坂村・千代田村・中村・萱生村・広永新田

■ 2 日清戦役従軍記念碑 大矢知村役場跡地（ＪＡ三重四日市大矢知支店前）

（明治４０年建立らしい）

「陸軍中将男爵大鳥義昌書」と記されています



■ 3 慰霊塔 大矢知村役場跡地（ＪＡ三重四日市大矢知支店前）



三重県遺族会『終戦５０周年 三重県遺族会記念史』（平成７）によると、１９１８（大正７）年、帝国在郷軍人会大矢知村分団により設置され、１９５２年再建されたようです。かつては大矢知興譲小学校校庭にあったようですが、移築の時期・経緯は不明です。

■ 1 護国社 天須賀 3 丁目

『終戦 50 周年三重県遺族会記念史』によると、1955（昭和 30）年に設置されたということです。



■ 2 位牌堂 富洲原墓地

共同墓地の一面にある「位牌堂」と呼ばれている施設です。



『富洲原小学校百周年記念誌』（1976 年）によると、「日清・日露の戦役・満州事変・日華事変・太平洋戦争において、戦没された英霊を遺族の希望によっておまつりする所で、現在、396 柱をおまつりしてある。毎月 15 日には、富洲原地区の各寺院の住職の奉仕により、遺族が集まり供養を続けており、毎年お盆の 8 月 15 日には、地区代表と遺族が出席して盛大な供養法要が行われている」とのことです。

■ 1 平和之礎 伊賀留我神社（茂福）



1998年5月 遺族会

裏に「支那事変 大東亜戦争 戦没者芳名」27名（没年1938年から1945年）が記されています。

■ 2 明治三十七八年戦役記念 鳥出神社（富田）



陸軍大将正三位勲一等功一級 男爵川村景明

■ 3 征清戦死碑 薬師寺（南富田）

1896（明治29）年2月25日建立

施主 大字茂福中・寄付有志中



裏に発起人として「従軍者」の名前が記されています。

■ 4 旌忠碑 薬師寺（南富田）

1906（明治39）年4月10日 建立

「林梵了 撰並書」

「明治37年日露開戦以来我郷茂福従軍者32人」

裏面には発起人の名前が記され、「世話方 大字 茂福」とあります。



■ 5 忠魂碑 薬師寺（南富田）

帝国在郷軍人会富田町分会

『ふるさと富田』（富田地区文化財保存会 2010年）によると、1915（大正4）年11月10日に建立されたということです。



■ 6 大東亜戦争殉国士慰霊塔 薬師寺（南富田）

1979年8月15日

富田地区自治会・遺族会

「四日市市長 加藤寛嗣 書」と記されています。



薬師寺の門前に、4基が並んでいます。

旌忠碑 大東亜戦争殉国士慰霊塔 忠魂碑 征清戦死碑



■ 7 （日露戦争戦死者の碑） 常照寺（茂福町）

1914（大正3）年3月7日 建立

表には中学校長による撰並書（大正3年1月下旬）とあり、1905（明治38）年3月7日で戦死（享年24）したことが記されています。碑の建立は1914（大正3）年3月7日、裏に記された名前から建立者は遺族であると思われます。



■ 1 殉国碑 別名霊園



四日市市長 吉田千九郎 書

昭和28年

■ 2 西南役戦死者藤井伊之吉君碑 羽津城址（大宮町）



1896（明治29）年11月 建立



■ 3 忠死者之碑 羽津城址（大宮町）



陸軍少将正五位勲二等功三級男爵大迫尚敏 書

羽津地区公式 WEB ページの地区紹介によると、1901（明治34）年に建立された日清戦争の碑で、1928（昭和3）年に現在地に移設される前は、岡山（通称垂坂山）の山頂にあったとのことです。



■ 4 征露忠死碑 羽津城址（大宮町）



1906（明治39）年4月 建立

元帥侯爵大山巖 書



■ 5 護国英霊碑 羽津城址（大宮町）



1954年3月 建立

羽津地区

三重県知事 青木理 書



4基が並んでいます。

西南役戦死者藤井伊之吉君碑 征露忠死碑 護国英霊碑 忠死者之碑



■ 1 靖博地蔵尊 浜一色



1944(昭和 19)年 1 月 21 日、訓練中に海蔵川付近で事故を起こし、亡くなった明野陸軍飛行学校北伊勢分教所(鈴鹿郡川崎村)の訓練生林靖博陸軍大尉を悼んで建立されました。

参考

p 1 5

足元に「靖博地蔵尊」と刻まれています。
建立年は不明ですが、近所の方のお話では、昭和 20 年代にはあったそうです。



2020年仏性院（川原町）に移設されました。

■ 2 護国神社 八幡神社（京町）



昭和 3 7（1962）年 1 月 建立

四日市市長平田佐矩之書

（撮影 2013年9月）

■ 1 故陸軍上等兵小林大吉忠魂之碑 共同墓地（東阿倉川）



1942年5月 建立

1941（昭和16）年に戦死した旨が記されています。
おそらく両親ではないかと思われる建立者の名前が記されています。

■ 2 日露戦役記念碑 海蔵神社



明治40（1907）年8月建立

裏に戦死者2名、従軍者61名の名前が記されています。

碑の形状、表の碑銘「日露戦役記念碑 元帥公爵大山巖書」など、市内東日野町の神明神社の日露戦役記念碑（1906・明治39年）と共通しており、同時期に各地で同様の碑が建立されたものと推測されます。

■ 3 平和塔(海蔵地区祈念碑) 海蔵神社



1963年1月 建立

「慰霊」の文字や石碑の意匠が、同じく海蔵地区三ツ谷町の多度神社にある慰霊碑（1965年）と共通しています。三重県遺族会のHPによると、「戦没者204柱戦災死14柱を祀る」とのことです。

「海蔵地区戦没者」の横に「三重縣護国神社 宮司林栄治書」とあります。

裏に「海蔵地区祈念碑」とあります。 「昭和三十八年一月 四日市市長平田佐矩 謹書」



石柱の端が不自然に切断されており、地域の方のお話では、1944（昭和19）年12月の東南海地震で倒壊したため保管してあった鳥居を用いたとのこと。



■ 4 戦災者之碑 唯福寺（東阿倉川）

1953年 建立 阿倉川



■ 5 慰霊 多度神社（三ツ谷町）



1965年 3月

「昭和四十年三月 三重県知事田中覚」

裏には「戦士之英霊」57名と「戦災者之霊」3名の名前が記されています。

石灯籠の建立時期、目的は、碑とは異なるようです。

■ 6 平和之礎 野田神社（野田町）

1980（昭和55）年 建立

野田親睦会

題字 四日市市遺族会会長 谷善昭謹書

裏に「大東亜戦争戦死者芳名録」として、1943～1947年に戦死した12名の名前、亡くなった年月日、場所などが、記されています。



■ 1 杉村僊之助之碑 諏訪神社

1894 年（明治 27）、日清戦争に従軍し病死した杉村僊之助の業績と、若くして亡くなったことを惜しみ長く後世に伝えること意図して建立されたと記されています。撰は、伊勢山田の松田齊。

『四日市市史』によると、杉村は三重紡績会社の社員で、1889 年（明治 22）、大日本綿糸紡績同業連合会が農商務省の官吏とともにインドでおこなった綿花の調査に参加、技術長斉藤恒三の指示でインド綿花を買い付け、綿糸生産に成果を上げました。碑文によると、1894 年（明治 27）、日清戦争に従軍、第三師団に所属し、12 月 26 日病死したということです。



参考
p 7

1896 年（明治 29）7 月に建立されましたが、1902 年（明治 35）8 月に「故あって」諏訪神社に移されたと追記されています。

■ 2 四日市空襲殉難碑 鵜の森公園

平和の誓い 四日市空襲殉難碑

1980 年 6 月 四日市空襲殉難碑建立委員会





殉難碑撰文

昭和十六年十二月八日に勃発した太平洋戦争は、ポツダム宣言受諾によって、同二十年八月十五日遂に我が国の敗戦に終わった。

この間、アメリカ空軍重爆撃機 B29 による日本本土への空襲は日ましに激化し 戦禍はとどまるところを知らなかつた。海軍燃料廠をはじめ多くの工場群を擁した四日市市も、前後六回にわたる苛烈な爆撃により壊滅的被害を受けた。

わけても最初の爆撃を受けた六月十八日の災禍は惨憺の一語に尽きる。即ち午前零時四十五分頃から約一時間にわたり、B29 三十五機の、三万発におよぶ油脂焼夷弾等の絨毯爆撃により市街地は灼熱のるつぼと化し、退路を断たれた多くの市民は、阿鼻叫喚の巷を彷徨した。炎の犠牲となるもの、壕に閉され窒息死するもの、身をかえりみず消火に一命を賭するもの、あわせて八百余名にのぼった。恐怖の一夜が明けると、一望焦土と化した焼跡に、ただ呆然とたたずむもの、未だ硝煙のくすぶる中を、肉親を求めて右往左往するもの、まさに戦争のうんだ悲劇である。

終戦後三十五年を経た今日、各方面の浄財によって、ここに新しく四日市空襲殉難碑を建立しその霊の安らかなることを願い、後世悲惨なる戦争の絶滅を期し、世界永久の平和を祈念するものである。

四日市空襲被災記録

被爆年月日昭和二十年六月十八日、同二十二日、同二十六日

同七月九日、同二十四日、同二十八日

戦災死者八百余名

重軽傷者一、七三三人

被災人口四九、一九八人

被災戸数一〇、四七八戸

昭和五十五年六月

四日市空襲殉難碑建立委員会

毎年6月18日には、碑の前で献花式が開催されています。



2013年6月18日 献花式

■（３）平和之礎 昌栄町

撤去されたため写真はありません。

昌栄町の平和之礎は、関係者の話によると、町内の個人の所有地内に建立された後、同氏が町内に所有する別の場所に移されました。毎年、慰霊行事が続けられましたが、関係者の転居や死亡により、私的に管理することが困難になったため、平成になって撤去されたということです。

1953年4月7日、中日新聞は碑の建立を次のように伝えています。

” 平和の礎 ” の石碑 四日市市昌栄町の遺族が建立

四日市市昌栄町の戦没遺族11名は平和の礎石となった人々の霊を永久に讃えるため、町内の一角に「平和の礎」の碑を建立、5日盛大な除幕式を行った。工費11万円を各遺族が出し合っており表面には日露戦争から太平洋戦争までの戦没者の戦死場所、年月が刻まれている。

また、同紙によると、沢田地区でも同様の「平和の礎」を鵜の森神社境内に建設予定であると報道されていますが、こちらの碑は確認することができませんでした。

■ 1 表忠碑 常磐小学校横



2001年

発起人 従軍者

(移設にあたり1909年建立の碑を建て替え)

常磐小学校正門前には、表忠碑と護国英霊碑が建立されましたが、2001（平成13）年、常磐小学校の運動場整備に伴い、駐車場横に移転されました。

そのひとつである日露戦争表忠碑は、常磐村（芝田、赤堀、久保田、大井手、松本、伊倉、中川原）の従軍者らが発起人となり、8名の戦死者を「忠死者」として表忠するため、1909（明治42）年9月に旧常磐村役場玄関前（現・常磐小学校校門前）に建立されたものです。既に痛みが激しかったため、移築にあたり建て替えられました。（2009年2月撮影）



■ 2 護国英霊碑 常磐小学校横

1954年12月19日 常磐地区
(2013年)7月撮影

常磐小学校正門前に、表忠碑と並び建立されましたが、2001（平成13）年、常磐小学校の運動場整備に伴い、駐車場横に移転されました。表忠碑は痛みが激しかったため立て替えられましたが、護国英霊碑は、そのまま移築されたことが、碑の説明として添えられています。



■ 1 日露戦役記念碑 神明神社（東日野町）



1906年9月 建立

元帥公爵大山巖書

碑の上部に巻きつけられたワイヤーは、転倒防止のため、後部の木に結ばれていました。

■ 2 大東亜戦争戦没者共同墓所 共同墓地（西日野町）



■ 3 表忠碑 伊勢安国寺跡（西日野町）

1953年12月建立

陸軍大将侯爵山縣有朋書



■ 4 表忠碑 室山町（記念橋前）



下部の四面に、それぞれ「日露戦死者」3名、「支那事変并大東亜戦死者」11名、「大東亜戦々死者」11名の名前、没年などが記されています。更に、明治38年5月、昭和20年7月、昭和20年12月の戦死した3名が追記されています。

建立年は記されていませんが、まず日露戦争戦死者の碑として建立された後に、「支那事変」「大東亜戦」の戦死者を追加したものと思われます。

■ 5 殉国者記念碑 吉田神社（八王子町）



老朽化により詳細不明ですが、『ふるさと八王子 今と昔 歴史民俗文化遺産』（四日市市八王子町自治会 ２００８）によると、碑の裏面には、「明治２７・８戦役」「明治３７・８戦役」「自昭和１２ 至昭和２１」の戦死者名が刻まれているということです。

■ 1 表忠碑 加富神社（山田町）



1964年4月 建立

小山田地区遺族会

元帥公爵大山巖書

裏に「西南 日清 日露 日華 大東亜戦役」の戦死者が記されています。

■ 1 日露戦役表忠碑 足見田神社（水沢町）



1967年11月 建立

水沢村

「陸軍大将従二位勲一等功一級伯爵奥保鞏書」



■ 2 出征之碑 愛宕神社（水沢町）

1980年8月15日 建立

「四日市市長加藤寛嗣書」

「支那事变(昭和十二年)」

「大東亜戦争（昭和十六年）」

「戦没者」 「出征者」



■ 1 (表忠碑らしい) 沙々貴神社跡 (川島町歴明寺横)



1918年 川島村

「日露従軍者」

「大正七年一月建之 川島村」

碑は傷みが激しく、読み取りが難しいのですが、『ふるさと散策“川島町のむかし”』（川島町連合自治会 1975年）に掲載された「佐々木神社跡にある表忠碑」の写真では、「表忠碑」「第三師団」「大庭二郎」の文字が見えます。

沙々貴神社旧跡は、歴明寺横にあります。

■ 2 忠魂碑 西福寺 (川島町)



1906 (明治39) 年

3月10日

従軍人建之

この碑がある場所には、「明治二十七年三十七年戦」の「記念康休園」(明治三十九年三月)であったことを示す門柱が残されています。



■ 3 真実之利 西福寺墓地（川島町）



1964年 仲秋 有志

「太平洋戦争における戦死者のため 真実之利」

「九十八人塚」

碑の下部に、川島町遺族会により「戦没者」
98名が記されています。



裏に「三郎塚 すきな生ふ 小さき塚かも 鋤きのこす 七草」とあります。

西福寺には伊勢三郎（義盛）のものとされる墓と三郎塚があり、「義盛忌」句会での田中七草の句が刻まれました。

■ 1 南無阿弥陀仏（戦死者の集合墓地） 西勝寺（智積町）



1953（昭和28）年8月 建立

「吉田政撰 永谷潔書 山本仙吉刻」

寺の中にある墓地の奥に並ぶ戦死者の墓の中央に、「南無阿弥陀仏」の碑があります。（2009年11月7日撮影）



■ 2 忠魂殿 椿岸神社（智積町）



三重県遺族会のHPによると

「桜地区出身159柱の戦没者を祀る」
とのことです。

（2009年11月7日撮影）



■ 1 表忠碑 神前小学校横



1911（明治44）年10月 建立

神前村 日清・日露戦役従軍者

表に「忠死者」として「明治二七八年没」5名と、「明治三七八年没」11名の名前が記されています。

■ 2 平和の礎 神前小学校横

1957年3月10日
四日市市神前地区連合自治会

裏に、戦没者の名前が記されています。

中日新聞は、碑の完成を次のように伝えました。

”平和の礎”完成 四日市で来月
除幕式

四日市市神前小学校庭に同地区戦没者の霊を慰める”平和の礎”が近く完成、3月10日午前10時から吉田市長らを迎えて除幕式を行う。

支那事变以降の戦没者156柱を祭り、平和への祈りをこめた高さ12尺、幅5尺、石造りの碑で、題字は前東大寺管長公海大僧正の筆になり、建設費36万円は地区民の寄付。（1957年2月21日）





■ 1 従軍記念碑 三重小学校



1896（明治29）年10月 建立
三重村尚武会

20p1470011

裏に、日清戦争に従軍した「外征陸軍軍人」23名と、「内戍陸軍軍人」9名、「病死」1名の名前が記されています。



■ 2 日露戦役記念碑 三重小学校



1908（明治41）年3月 建立

三重村有志者



裏に日露戦争の「忠死者」10名と「従軍者」83名の名前が記されています。

■ 3 平和之礎 三重小学校

1953年4月 建立



裏に「大東亜戦戦没者」の163名の名前が記されています。



■ 1 英霊之碑 上海老町墓地



1950（昭和25）年3月 建立
上海老原遺族一同



■ 2 南無阿弥陀佛 下海老町共同墓地



1951（昭和26）年2月 建立

■ 3 戦没者之碑 赤水町共同墓地



1951年3月 建立

赤水遺家族一同

裏に戦死者11名（21～37歳）の名前が記されています。

■ 4 表忠碑 縣神社横（平尾町）



1921（大正10）年4月 建立

発起者 縣村在郷軍人一同

賛助者 縣村民一同

陸軍大将公爵山縣有朋 書

1921年に建立された碑には、「日露戦役忠死者」8名が記されていますが、その後、昭和期の「戦没者」が追加されています。

碑の裏下部に「昭和二十六年五月吉日」「支那事変及大東亜戦争戦没者」が追記され、さらに別の13名が追記されました。（赤水、上海老原、下海老原、平尾、江村、北野、黒田、あがたが丘）

■ 5 南無阿弥陀仏 福泉寺墓地（平尾町）



南無阿弥陀仏 平尾町一同

裏に、「日露戦役」2名、「日支事変」4名、「大東亜戦争」21名の名前が記されています。南無阿弥陀仏の碑を中心に、戦死者の墓が7基並んでいますが、かつては14基であったと推測されます。南無阿弥陀仏碑に建立年の記載はありませんが、碑と並んで建つ戦死者個人の墓の建立は昭和30年4月と記されています。

■ 6 忠魂碑 江村町集落センター横

1976年11月 建立

江村町自治会 遺族会 光壽会
山本石材店謹刻

裏に、(明治38)年「日露戦役」1名と、昭和14年から20年までの16名の名前が刻まれています。



■ 7 平和之礎 北野天満神社（北野公会所）



1955年 建立

『終戦50周年 三重県遺族会記念史』（三重県遺族会 1995年）によると、北野町遺族、北野町有志一同により、1955年9月に建立されたようです。

■ 1 記念碑 大宮神明社（日永）



1898（明治31）年3月 建立
親族・有志

記念碑は、鳥居の向かって左、看板の奥にあります。

1894（明治27）年、清国で戦死した日永村（大瀬古）田中光治郎（明治6年生）の記念碑です。

親族と有志によって建立されたことが記されています。

参考
p 8

■ 2 表忠碑 日永小学校横



1909（明治42）年8月 建立 日永村

碑には「明治四十二年八月 日永村」とあり、「表忠碑」正面の下部には、「日露役忠死者」として、5名が記されています。また、「西南役忠死者」1名、「日清役忠死者」3名、「支那事変忠死者」が記されていますが、「1953年12月 日永村 在郷軍人」とあり、「支那事変忠死者」については、後に追加したものと思われます。

■ 3 記念碑 西唱寺（日永）



参考

p 9

1898 年（明治 31）12 月建立

日清戦争で病死した陸軍歩兵二等兵の記念碑です。
発起人は村長をはじめ村の人びとで、遺族や有志により建立されました。

■ 4 泊村戦没者碑 泊町公会所

1954年10月 建立

区民一同

表には「泊村戦没者碑」とあり、その下に太平洋戦争の戦死者21名の名前が記されています。

亡くなった年月日、場所などは『日永郷土史』（日永郷土史研究会平成元年）に掲載されています。



■ 5 忠霊塔 泊山

参考

p 20

1966年8月15日建立



■ 6 平和之塔 泊山

1961（昭和36）年3月 建立
四日市市傷痍軍人会

1977年8月に、泊山に移設されました。



泊山公園の忠霊塔と平和之塔

■ 1 忠魂碑 小古曽神社



1908（明治41）年9月 建立
小古曽区

奥にあるのが忠魂碑です。



裏に、「明治三十七八年役戦死者」が記されています。

■ 2 平和之礎 小古曽神社



1961年3月 建立

小古曽町自治会

裏に、「殉国者芳名」が記されています。

■ 3 慰霊碑 古市場墓地（采女町）

1977年9月23日建立

古市場有志一同

「終戦後三十三回忌に当り古市場有志一同相謀り之を建てる」とあります。



■ 4 おもいでのにしるべ 八幡神社（采女町）



1959（昭和34）年5月建立
采女町 公没者遺族会

「おもいでのにしるべ」の下に、
58名の名前が記されています。



■ 5 平和之礎 八幡神社（南小松町）



1962年10月 建立

■ 6 表忠碑 小松神社（北小松町）

1906（明治39）年8月 建立



■ 7 故陸軍輜重輸卒 古市平吉君碑 小松神社（北小松町）



1907（明治40）年3月 建立

大字軍人・区民一同



1905（明治38）年7月27日、清国において溺死した旨が記されています。

■ 8 平和之礎 小松神社（北小松町）

1955年10月



三重県知事田中覚 書



■ 9 俱會一處 上品寺（貝家町）

1949年3月
貝家町

33名の没年月日（1938年～1846年）と名前が記されています。



■ 10 陸軍騎兵上等兵勲八等種瀬幸吉碑 上品寺（貝家町）

1907年12月

1905（明治38）年4月6日清国において戦死したことが記されています。



■ 11 釋堅忠勇送信士 了信寺（波木町）

1910（明治43）年10月
発起人 波木区在郷軍人

明治38年3月7日戦死した陸軍歩兵一等卒勲八等の操信士の碑であることが、記されています。

（2013年8月撮影）



■ 1 故陸軍一等卒北川栄吉君碑 金剛寺（馳出町）

1905(明治38)年1月建立



■ 2 卯野精忠君記念碑 御蔭神社（塩浜）



建立年不明 日清戦争従軍者の記念碑

碑には、日清戦争に従軍し帰国後亡くなった旨が記されています。

碑の状態からみて、改修または改築されていると思われますが、建立年、建立者、改修等の経緯は不明です。

■ 3 忠魂碑 御蔭神社（塩浜）



建立は1910（明治43）年5月らしい

陸軍中将従三位勲一等
大久保春野書

裏には、明治10年、29年、37年、38年、39年の戦死者が記名されていますが、後に追記されたと思われる名前もあり、経緯は不明です。

塩浜地区連合自治会によって昭和33年に添えられた石板には、碑は、明治42年5月旧塩浜村の戦没者を顕彰するために御蔭町1丁目に建立されたこと、その後、昭和の戦没者を含め「世界平和の礎として仰ぎ鎮め奉る」碑として、御蔭神社に移されたことが記されています。



■ 4 平和之礎 御蘭神社（塩浜）

平和之礎 1992年2月

氏子一同



■ 5 人がその仲間達のために命を捨てるほど崇高な愛はない

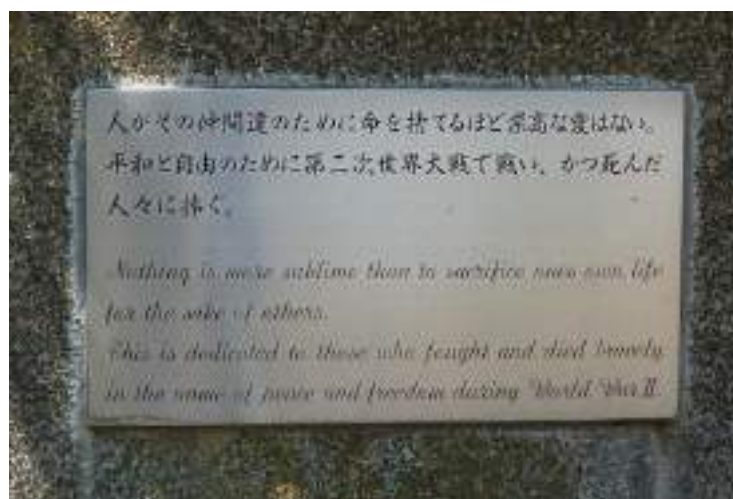
平和と自由のために第二次世界大戦で戦い、かつ死んだ人々に捧ぐ 石原町



人がその仲間達のために命を捨てるほど崇高な愛はない。

平和と自由のために第二次世界大戦で戦い、かつ死んだ人々に捧ぐ。

Nothing is more sublime than to sacrifice
ones own life for the sake of others.
This is dedicated to those who fought
and died bravely in the name of peace
and freedom during World War II.



石原産業四日市工場内に設置された捕虜収容所において、昭和19年から20年にかけて亡くなった連合軍兵士のための碑です。建立年、建立者等の記載はありませんが、建碑式の様子を伝える伊勢新聞の記事から、建立は1947年（昭和22）4月と考えられます。

参考

p 16

■ 1 表忠碑 大治田 3 丁目



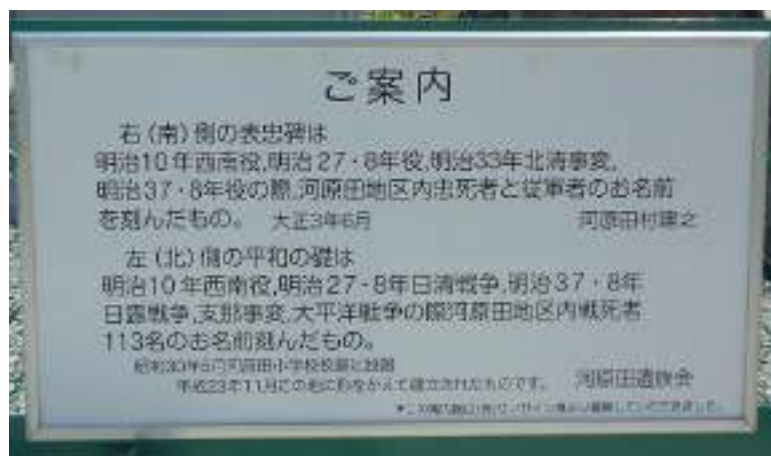
1914（大正3）年6月建立
河原田村



元帥公爵大山巖書

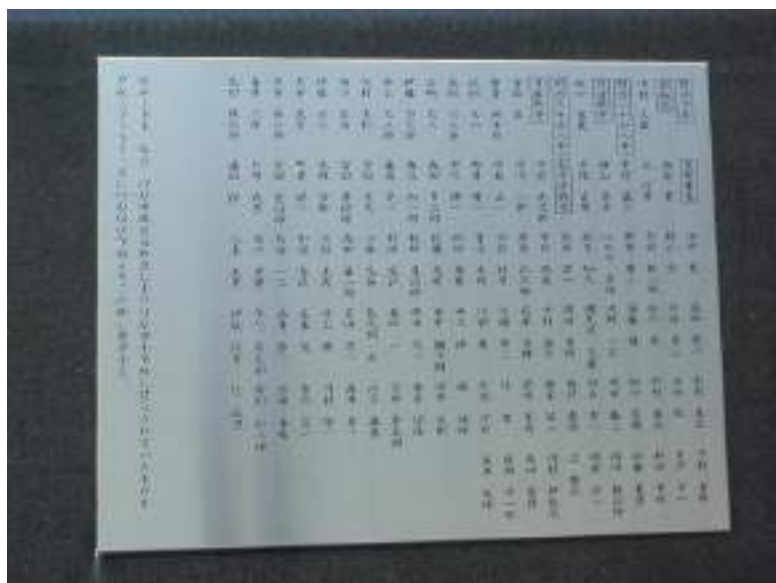
建立は1914（大正3）年ですが、その後一部修復されたものと思われます。

裏には、「忠死者」として「明治十年西南役」1名、「明治二十七八年役」1名、「明治三十七八年役」14名の名前と、「明治十年西南役」「明治二十七八年役」「明治三十三年北清事変」「明治三十七八年役」の従軍者の名前が記されています。（2013年5月8日撮影）



■ 2 平和之礎 大治田3丁目

2011年11月 建立
(2013年5月8日撮影)



1955（昭和30）年5月 河原田小学校前に河原田地区遺族会により建立された平和之礎碑を
2011（平成23）年11月移設するにあたり、新たに建て替えられたものです。

裏に「明治十年西南役」1名、「明治二十七八年日清戦争」1名、「明治三十七八年日露戦争」14名、
「支那事変」29名、「太平洋戦争」68名の戦死者の名前が記されています。

■（2）平和之礎 河原田小学校



1955年5月 建立
(2011年撤去)

河原田地区遺族会

(2009年6月3日撮影)

2011（平成23）年11月、大治田3丁目へ移設、新たに建て替えられたため、撤去され、碑が
建立されていた場所は駐車場となりました。

『楠町史』によると、楠町の慰霊碑について次のように説明されています。

村会議事録に依ると最初に出て来るのは、明治33年5月23日、官有地払下げを受け（総縄511, 7歩）西南の役よりの記念碑を建立したと記してある。各字ともおそらく終戦前後、一、二転しているが現存している。楠村全体の記念碑建立は明治39年楠小学校の中に建立許可が出た。終戦で進駐軍より指令があり一時土中に埋めたのを来教寺に移転祭っている（後略）

この中で、楠町最初とされる明治33年の記念碑についての詳細は不明です。現存する慰霊碑のうち西南の役の戦死者が記されているのは、楠郷総社神明社の「忠死記念碑」と、楠町北一色の「報恩碑」ですが、いずれも戦後再建されたものと思われます。

■ 1 報恩碑 楠町北一色



「西南ノ役」1名、「日露戦役戦没者」3名、「支那事变大東亜戦戦没者」8名の名前が記されています。

■ 2 勇往敵愾 来教寺（楠町本郷）

1906（明治39）年建立

1950年再建・追加



題額の「勇往敵愾」や「明治三十九年天長節」など碑の形状から、同じく楠町内の南御見束神社と同様の経緯で建立されたものと思われますが、題額の下に刻まれた名前についての説明はなく、慰霊碑というよりは従軍記念の碑と考えられます。

『楠町史』（1978年）によると、戦後の一時期「戦後処理で、合同庁舎前に埋められ」ていたとのこと。碑の裏面の説明によると、この碑は楠小学校の校庭にあったもので、1950年3月8日、発起人2名と遺族によって来教寺に移され、住職によって「昭和之役戦没者」18名の名前が刻まれました。

■ 3 殉国之碑 楠小学校



1958（昭和33）年7月 建立（楠町殉国之碑建設委員会）

裏に、「楠町殉国之碑建設委員長 楠町長 服部榮門」による「殉国之碑建立趣意」が記されています。

■ 4 忠死記念碑

楠郷総社神明社（楠町北五味塚）



明治10年の戦死者1名と、明治38年戦死者6名の名前が刻まれています。

「明治三十四年四月之建」「区民有志者一同」とありますが、明治10年と明治38年の戦死者が並んで記されていることから、現存の碑は、明治期に建立されたものを再建したのではないかと思います。また、明治34年建立当初は明治10年（西南戦争）の戦死者のみであつたものに、明治38年（日露戦争）の戦死者が追記され、その後、新たに再建されたと考えられます。

争）の戦死者が追記され、その後、新たに再建されたと考えられます。

■ 5 楠町靖国社 楠郷総社神明社（楠町北五味塚）

20p1480933



楠町靖国社創建会

鳥居に「明治二十七八年役記念」らしい文字が見えます。

詳細は不明ですが、鈴鹿川改修のため、1982年に現在地に移設されたことが記されています。

（2013年8月撮影）

■ 6 勇往敵愾 南御見束神社（楠町南五味塚）



1906年 建立

勇往敵愾

明治39年天長節

陸軍大将男爵立見尚文 題

明治37年の戦死者1名、明治38年の戦死者1名・病死者2名、そして従軍者25名の名前が記されています。

忠魂碑の左奥に見えるのが「勇往敵愾」碑です。



■ 7 忠魂碑 南御見束神社（楠町南五味塚）



1968（昭和43）年10月 建立
南五味塚区

忠魂碑
三重県知事田中覚 書

神社は「南御見束」ですが、地区名は「南五味塚」です。

四日市における戦争と死者に関わる記事見出し一覧（1878～1950）

明治11	1878	5月12日伊勢新聞 「大矢知村に建造シタ殉難記念之碑銘」
明治20	1887	10月5日 伊勢新聞 「朝明郡招魂祭 大矢知村での執行状況」 10月14日伊勢新聞 「朝明郡招魂祭の後報 祭儀の状況」 10月19日伊勢新聞 「三重郡招魂社の設置 四日市諏訪神社境内に設立の企て」 11月23日伊勢新聞 「諏訪神社境内で挙行」 12月9日 伊勢新聞 「記念碑落成 四日市諏訪神社境内に西南役戦死者の招魂碑」 12月10日伊勢新聞 「十年祭執行 諏訪神社境内の記念碑建設」 12月13日伊勢新聞 「十年祭後報 儀式の状況」
明治22	1889	12月10日伊勢新聞 「四日市の招魂祭 十五日に諏訪神社で執行」 12月13日伊勢新聞 「三重郡招魂祭準備の模様 諏訪神社で祭典執行と余興」 12月17日伊勢新聞 「三重郡招魂祭の景況 四日市諏訪神社境内での執行状況」
明治25	1892	2月8日 伊勢新聞 「尚武会招魂祭費の寄贈を議決す 三重朝明郡尚武会幹事会開会」 4月14日 伊勢新聞 「朝明郡招魂祭の準備 三重朝明両郡町村長が四日市北町十九村屋で協議」 4月15日 伊勢新聞 「三重郡招魂祭 祭事委員五名撰出、近日会合して準備の相談」 4月24日 伊勢新聞 「三重郡招魂祭 五月六日に四日市町諏訪神社境内で執行」 5月8日 伊勢新聞 「三重郡招魂祭 一昨六日、諏訪神社で執行状況」
明治26	1893	4月11日 伊勢新聞 「朝明郡招魂祭 来る十五日に第十七周執行」 4月13日 伊勢新聞 「建碑式及招魂祭の景況 三重郡川原田村川尻での執行」 4月18日 伊勢新聞 「朝明郡招魂祭の況 大矢知村観音山で執行」 10月3日 伊勢新聞 「三重郡の招魂祭 四日市中町信光寺で西南の役戦死者等記念祭」 10月7日 伊勢新聞 「招魂祭と参拝 四日市中町信光寺で開催」 10月7日 伊勢新聞 「尚武会幹事会 予後演習費用、笹岡留吉合祀の件を協議」 12月13日伊勢新聞 「招魂祭 三重郡生川祠宮始め神職一同が同郡戦死者の為め執行」
明治27	1894	7月27日伊勢新聞 「酒井三朝尚武会長 在郷兵召集後の心得書を送付」 7月28日伊勢新聞 「尚武会の寄送 酒井会長海軍務後備下士卒応召出発に際し玉丹と書面送付」 8月1日 伊勢新聞 「軍人招待会 朝明郡羽津村有志者が村内予備後備兵を招待の宴」 8月9日 伊勢新聞 「三重郡神前村の決議 現役員及び応召の軍人該家族者への扶助」 8月11日伊勢新聞 「内部村の義気 応召者家族への救助」 8月24日伊勢新聞 「四日市医会の無料診療 四日市予後備兵の応召者の家族に限り」 8月25日伊勢新聞 「四日市の義気 応召家族にして生計困難なるものに全員負*の賑恤」 8月26日伊勢新聞 「四日市応召家族賑恤」 8月28日伊勢新聞 「開戦詔勅奉読式 四日市校で執行」

明治27	1894	<p>9月1日 伊勢新聞 「軍人の子弟に限り授業料を免除す 四日市高等、四日市、浜田納屋、海蔵の五校」</p> <p>9月9日 伊勢新聞 「三朝両郡軍事公債応募者 三朝郡衙扱」</p> <p>9月9日 伊勢新聞 「三朝両郡軍事公債応募者 三朝郡衙扱」</p> <p>9月25日 伊勢新聞 「第一回追吊法会 四日市南町の渡韓三重県人保護会、常德寺で軍人の追吊会」</p> <p>9月25日 伊勢新聞 「三重郡招魂祭委員 四日市町長、川原田塩浜両村長、常磐村長が相談会」</p> <p>10月4日 伊勢新聞 「諏訪神社招魂祭 明後六日に執行」</p> <p>12月14日 伊勢新聞 「戦死者葬儀 三重郡日永村田中光二郎氏の会葬概況」</p> <p>12月23日 伊勢新聞 「追吊会 三重郡日永村両聖寺で三重郡戦死者の法要」</p>
明治28	1895	<p>2月19日 伊勢新聞 「故杉村氏の建碑 諏訪神社内に建立ののための拠金募集」</p> <p>3月1日 伊勢新聞 「故杉村僊之助氏の葬式 明后三日に四日市三瀧川原で執行」</p> <p>3月1日 伊勢新聞 「故杉村氏記念碑 建設地は諏訪神社内、墓所は専修寺」</p> <p>5月30日 伊勢新聞 「三重朝明の徴兵検査 四日市中新町常德寺で執行」</p> <p>6月28日 伊勢新聞 「四日市歓迎会 会場は諏訪神社境内を充てる見込」</p> <p>6月29日 伊勢新聞 「尚武会の歓迎 軍隊凱旋の当日煙火放揚」</p> <p>7月2日 伊勢新聞 「三重朝明教育者の祝捷会 去る廿九日四日市海岸馬起で開催」</p> <p>7月6日 伊勢新聞 「三重朝明両郡出身者軍人帰郷す 尚武会が煙火放揚して歓迎」</p> <p>7月6日 伊勢新聞 「四日市歓迎会 明七日諏訪神社境内で凱旋の祝宴」</p> <p>7月7日 伊勢新聞 「三重朝明歓迎補聞 三重郡川原田塩浜の両村で慰労宴、赤堀は石採の囃で歓迎外」</p> <p>7月9日 伊勢新聞 「四日市帰郷兵 歓迎祝宴は本月廿日過ぎか」</p> <p>7月16日 伊勢新聞 「軍人に銀盃を贈る 三重郡川島村法潤協会が征清軍人に贈与」</p>
明治28	1895	<p>7月17日 伊勢新聞 「羽津村の凱旋祝宴会 十一月の天長節に執行」</p> <p>7月19日 伊勢新聞 「川島帰郷兵歓迎慰労会」</p> <p>7月20日 伊勢新聞 「内部村凱旋慰労会」</p> <p>7月24日 伊勢新聞 「四郷村の慰労祝宴 軍人廿四名を招待して宴会開会」</p> <p>7月25日 伊勢新聞 「塩浜村と川原田村の凱旋祝 塩浜学校、川原田学校で開催」</p> <p>7月28日 伊勢新聞 「海蔵村軍人祝勝と慰労会 廿六日川川原町客月亭で開催」</p> <p>7月28日 伊勢新聞 「四郷村軍人慰労会 去る廿五日同村笹川学校で執行」</p> <p>7月31日 伊勢新聞 「富田村慰労会 去る廿八日同村尋常校で執行」</p>
明治28	1895	<p>8月3日 伊勢新聞 「日永村の慰労会 明四日同尋常校で執行、後興正寺で慰労宴」</p> <p>8月6日 伊勢新聞 「三重村凱旋祝賀会 去る三日同村尋常校で挙行」</p> <p>8月8日 伊勢新聞 「下野村凱旋祝宴会 同村尋常校で開会」</p> <p>8月9日 伊勢新聞 「四日市軍人歓迎会 雨天で延期の同会 昨日三瀧川で挙行」</p> <p>8月10日 伊勢新聞 「四日市軍人歓迎会 一昨日三瀧川原で執行の光景」</p>
明治28	1895	<p>8月10日 伊勢新聞 「尚武会委員 幹事会で建碑の位地、費額、招魂祭の件を議す」</p> <p>8月17日 伊勢新聞 「羽津村凱旋祝宴会 羽津山で開会、発起人は森七郎」</p> <p>8月23日 伊勢新聞 「羽津村凱旋祝宴 羽津山での祝宴景況」</p> <p>8月24日 伊勢新聞 「歓迎宴 四日市高砂兆民一同、稲葉町荒鹿宅で祝宴」</p>
明治28	1895	<p>11月20日 伊勢新聞 「戦勝記念碑 三重朝明郡の同碑三瀧川の北側の西方に建設」</p> <p>11月23日 伊勢新聞 「三重朝明郡の招魂祭 十二月十日三瀧川原で執行」</p> <p>12月1日 伊勢新聞 「招魂祭 来る十日執行の三重朝明郡の招魂祭」</p> <p>12月5日 伊勢新聞 「僧侶の苦情 西南戦死者記念碑建設に就き」</p> <p>12月14日 伊勢新聞 「僧侶の寄附 三重朝明郡の僧侶一同十日の招魂祭に金品寄附」</p>

明治29	1896	2月29日伊勢新聞「建碑式 朝明郡富田村字北村薬師寺門前に戦死者の記念碑建立」 3月29日伊勢新聞「建碑式 三重郡四郷村大八王子に日清戦役殉死者の記念碑」 9月17日伊勢新聞「記念碑の撰文 三重郡羽津村の故味香二等軍曹の建設碑」 11月7日伊勢新聞「三重郡招魂祭 来る九日に諏訪神社で執行」 11月9日伊勢新聞「建碑式 三重郡羽津村の故味香軍曹の碑」 12月10日伊勢新聞「三重郡桜村々葬式 故陸軍歩兵芳山徳松氏の葬儀概況」
明治31	1898	4月27日伊勢新聞「建碑挙式 三重郡日永村の故田中光次郎氏の建碑式執行か」 5月1日伊勢新聞「記念建碑式 一昨日挙行の田中光郎氏の建碑式執行の模様」
明治32	1899	3月5日伊勢新聞「三重郡の戦勝記念日 三月九日と定め祝意を表彰」
明治35	1902	3月12日伊勢新聞「凍死軍人追吊会 真宗四日市教会」 3月14日伊勢新聞「願行寺の凍死軍人追吊会」
明治36	1903	10月25日伊勢新聞「三重郡有志秋期園遊会 三重郡大矢知村観音山で開会」
明治37	1904	2月23日伊勢新聞「太田覚眠氏 日露開戦に際し引上げ要請するも応ぜず」 2月27日伊勢新聞「太田覚眠師の書面 引上げ法人に托した書面の内容」 3月27日伊勢新聞「四日市軍人同情会 市役所が生計困難な出征軍人家族を調査中」 5月26日伊勢新聞「故伊藤軍曹の葬儀」 6月5日伊勢新聞「関鉄会社職工の戦 * 祝賀提灯行列、出征軍人に慰問状発送、故伊藤軍曹の市葬」 6月7日伊勢新聞「伊藤軍曹の市葬」
明治37	1904	7月 9日伊勢新聞「名誉の戦死者阪下上等兵 三重郡四郷村大字東日野出身」 7月19日伊勢新聞「故辻伍長の市葬 一昨日昌栄新田での執行の模様」 9月21日伊勢新聞「戦死者追善会 去る十三日より三重郡日永泊の光明寺で執行」 9月22日伊勢新聞「四日市の遼陽戦死者 四日市市出身の兵士氏名」 9月26日伊勢新聞「四日市婦人会 遼陽戦の戦死者家族を慰問」
明治37	1904	10月 9日伊勢新聞「戦病死者村葬 本日、三重郡常磐村で執行」 10月28日伊勢新聞「太田覚眠師消息 一昨日廿六日、露国より留守宅へ到着」 11月 1日伊勢新聞「四日市の市葬 遼陽戦での名誉の戦死者三氏」
明治37	1904	11月15日伊勢新聞「辻騎兵の勇猛 水沢村出身の同氏の軍務詳細」 11月15日伊勢新聞「四日市の市葬 遼陽役の戦死者。一昨十三日三瀧川原で施行」 11月16日伊勢新聞「名誉の負傷者松下軍曹 四日市立町出身の同氏略歴」 11月24日伊勢新聞「太田覚眠師の書信 在欧ペルミ市より川上公使宛の私書の全文」 11月27日伊勢新聞「太田覚眠師の書信(承前)」 11月28日伊勢新聞「太田覚眠師の書信(承前)」
明治37	1904	12月2日 伊勢新聞「憐れなる軍人家族 三重郡神前村大字西野出身の西林上等兵」 12月11日伊勢新聞「太田覚眠師の談 去る七日、長崎帰着の節の談話」 12月17日伊勢新聞「太田覚眠師 長崎帰着後の行程」 12月21日伊勢新聞「太田覚眠師歓迎会 本日帰酒」 12月22日伊勢新聞「太田覚眠師の帰市 廿一日帰酒、中新町常德寺で歓迎」
明治38	1905	1月15日伊勢新聞「沙河方面の戦死者」 1月18日伊勢新聞「太田覚眠師 本山の急電で京都に赴く」 1月18日伊勢新聞「四日市の市葬 沙河方面の大戦での名誉の戦死者」 1月22日伊勢新聞「故伊藤少尉村葬式 四郷村村葬の概況」 1月22日伊勢新聞「太田覚眠師の上京 本山より従軍布教を命ぜられる」 1月23日伊勢新聞「故伊藤少尉村葬式 其の詳細」 1月26日伊勢新聞「戦死村葬」

明治38	1905	2月8日伊勢新聞 「四日市の市葬 来る十二日、同市出身の戦死者三名の葬儀執行」 2月13日伊勢新聞 「四日市通信 市葬」 2月25日伊勢新聞 「袋町出身の野戦砲兵軍曹戦死」 3月25日伊勢新聞 「四日市出身中の奉天戦役死傷者」「戦死者の遺骨到着」 3月31日伊勢新聞 「四日市通信 奉天大戦の死傷者」
明治38	1905	4月6日伊勢新聞 「四日市通信 三重郡の戦死者の村葬」 4月21日伊勢新聞 「四日市通信大矢知村の戦病死者」 5月1日伊勢新聞 「戦死者村葬式 三重郡四郷村」 5月5日伊勢新聞 「四日市通信 靖国神社臨時大祭の遥拝式」 5月7日伊勢新聞 「堀軍曹の葬儀 三重郡内部村の村葬」 5月13日伊勢新聞 「戦死者葬儀 三重郡富田村の村葬」
明治38	1905	6月7日伊勢新聞 「四日市通信 日本海戦と奉天役戦死者の遺骨到着」 6月8日伊勢新聞 「四日市の市葬 来る十一日に合葬式挙行」 6月17日伊勢新聞 「四日市通信 日本海海戦死者合葬式」 6月20日伊勢新聞 「四日市通信 日本海戦戦死者に金鷄勲章」 6月23日伊勢新聞 「四日市の市葬 日本海戦戦死者の死葬、二十五日健福寺で執行」 6月27日伊勢新聞 「四日市通信 日本海戦戦死者の市葬」
明治38	1905	7月10日伊勢新聞 「三重郡の村葬 三重郡河原田村」 7月11日伊勢新聞 「四日市通信 戦病死者追悼会」 8月29日伊勢新聞 「四日市の市葬 上新町出身の村瀬輜重輸卒の葬儀」 10月22日伊勢新聞 「四日市通信 三重郡桜村葬」 10月22日伊勢新聞 「追吊会参拝 愛国婦人会四日市幹事会が市内戦病死者英霊追吊」 10月25日伊勢新聞 「四日市通信 戦病死者追吊法会」
明治38	1905	11月11日伊勢新聞 「四日市通信 三重郡大招魂祭」 12月1日伊勢新聞 「四日市通信 辻僊吉氏 遺骨到着」 12月6日伊勢新聞 「四日市の市葬 九日北町建福寺で執行」 12月10日伊勢新聞 「四日市の市葬 昨日北町建福寺での執行の様様」 12月12日伊勢新聞 「三重郡の招魂祭 来る十七日尚武会が主催して三瀧川原で執行」 12月19日伊勢新聞 「三重郡招魂祭 十七日に執行の詳細」 12月20日伊勢新聞 「招魂祭に於ける祭文 高井中将祭文・有松知事祭文 其の全文」
明治39	1906	1月25日伊勢新聞 「太田覚眠師 本願寺特派員として浦塩へ布教」 1月31日伊勢新聞 「太田覚眠氏が談話」
明治39	1906	3月1日伊勢新聞 「尚武会の招魂祭」 3月10日伊勢新聞 「商業学校へ太田覚眠氏と斉藤恒三氏が寄附」 3月22日伊勢新聞 「戦死者追吊法会」 3月24日伊勢新聞 「戦病死者追吊会」 3月29日伊勢新聞 「四日市通信 招魂祭と凱旋祝賀会」 4月21日伊勢新聞 「四日市招魂祭 昨日諏訪神社で挙行、其の詳細」 4月22日伊勢新聞 「四日市凱旋祝賀会 昨日、新設の保光苑で挙行、其の詳細」
明治39	1906	5月20日伊勢新聞 「羽津村招魂祭 今二十日に施行か」 5月25日伊勢新聞 「追吊会と歓迎会 商業学校卒業生の同窓会が二十日に施行」 6月10日伊勢新聞 「旅順忠魂碑醸金募集 四日市市長が提唱」 6月25日伊勢新聞 「四日市通信 旅順戦死者記念碑義捐金取纏」 8月3日伊勢新聞 「四日市通信 白玉山忠魂碑寄付金」 9月16日伊勢新聞 「忠魂殿新築地 四日市市大字川原町の三瀧川添ひ」
明治39	1906	11月25日伊勢新聞 「四日市通信 保々村の忠魂吊祭」

明治40	1907	1月10日伊勢新聞「太田覚眠氏帰坊 数日前浦塩より帰朝」 1月22日伊勢新聞「四日市通信 戦死歩兵の市葬」 1月29日伊勢新聞「四日市通信 遼陽役戦死者遺族に賜金」 2月22日伊勢新聞「四日市通信 戦死兵村葬式」 4月15日伊勢新聞「四日市通信 三瀧川の忠魂殿」 5月2日伊勢新聞「忠魂殿の建設に寄附」
明治40	1907	7月22日伊勢新聞「川原町の忠魂殿の地鎮祭」 7月23日伊勢新聞「四日市通信 北町川原町の有志者が三瀧川原に納涼場を計画」 8月13日伊勢新聞「忠魂殿建設商議会 十一日開会、会長に伊藤伝七氏」 8月14日伊勢新聞「三重郡彰功会 各宗寺院が忠魂殿建設事務設営のため設立」 11月3日伊勢新聞「四日市通信 当市天長節、三重郡海蔵村の記念碑除幕」 12月20日伊勢新聞「四日市通信 三十七・八年戦役遺族救護金」
明治41	1908	2月24日伊勢新聞「四日市通信 諏訪神社保光苑を市の公園とす」 5月7日伊勢新聞「靖国神社遙拝式 六日に四日市尚武会が諏訪神社で挙行」
明治42	1909	2月8日伊勢新聞「忠魂殿の将来 三瀧川北岸に建設の忠魂殿は完成の見込みなし」
明治43	1910	11月1日伊勢新聞「天長節祝賀会 諏訪神社保光苑で奉賀会挙行」 11月2日伊勢新聞「天長節祝賀会 諏訪神社保光苑での開式順序」 11月3日伊勢新聞「四日市天長節祝賀会 諏訪神社保光苑で式後に園遊会」
明治44	1911	3月12日伊勢新聞「招魂祭と在郷軍人総会 十日、三重郡海蔵村で執行」 3月13日伊勢新聞「三重郡雑信 三十三連隊軍旗祭、常磐村表彰者病死、羽津村招魂祭」 6月12日伊勢新聞「廃兵及遺族調査」
大正2	1913	10月28日伊勢新聞「三重郡招魂祭」
大正3	1914	2月26日伊勢新聞「戦死者村葬 三重郡富洲原村出身」 2月28日伊勢新聞「富田電話 戦死村葬」 3月3日伊勢新聞「戦死せる生川上等兵 富洲原村に於ける村葬状況」
大正3	1914	10月14日伊勢新聞「四日市電話 靖国神社遙拝式」 10月18日伊勢新聞「四日市電話 靖国神社遙拝式」「軍隊接待協議」 10月23日伊勢新聞「四日市電話 靖国神社遙拝式 出征者家族慰問祝捷会当日の旗行列」 10月24日伊勢新聞「名誉の戦死者 三重郡桜村字智積の山中三等機関兵曹」 10月25日伊勢新聞「荘厳なる遙拝式 尚武会及在郷軍人分会が諏訪神社で挙行」
大正3	1914	11月22日伊勢新聞「四日市電話 山中兵曹長村葬」 11月23日伊勢新聞「桜村葬雑記 西勝寺での山中二等兵の村葬」
大正6	1917	10月4日伊勢新聞「大矢知軍人会総会 三・四日開会、戦病死者追弔会も執行」 10月20日伊勢新聞「四日市尚武会遙拝式」
大正7	1918	1月25日伊勢新聞「三重郡雑信 追弔会」 1月27日伊勢新聞「仏教会と追弔会 三重郡保々村」 11月16日伊勢新聞「四日市凱旋兵歓迎 其の方法」 11月19日伊勢新聞「各地祝捷 四日市市」 11月22日伊勢新聞「四日市祝捷会余聞」 11月30日伊勢新聞「戦病死者追弔法会 三重郡川島村西福寺で修行か」 12月14日伊勢新聞「三重郡戦病死者追弔 十二日川島村西福寺で修行」
大正8	1919	1月13日伊勢新聞「四日市軍人家族慰籍会 十二日、四日市愛国婦人会幹事部が開会」 1月14日伊勢新聞「軍人家族慰籍会 雑観」
大正8	1919	10月21日伊勢新聞「靖国神社遙拝式 四日市尚武会が諏訪神社で開会」 10月24日伊勢新聞「四日市の招魂祭 四日市尚武会が開会」
大正8	1919	12月10日伊勢新聞「三重郡招魂祭 在郷軍人三重郡連合第四回総会」

大正9	1920	4月1日伊勢新聞 「忠魂碑除幕式 三重郡大矢知村」
大正13	1924	4月6日伊勢新聞 「飛行機も来る 大矢知招魂祭」 4月8日伊勢新聞 「飛行機から弔文を投下 大矢知の招魂祭」 7月30日伊勢新聞 「保々表忠碑除幕」 10月7日伊勢新聞 「河原田招魂祭」
大正14	1925	10月24日伊勢新聞 「四日市の遥拝式 四日市尚武会主催」
昭和6	1931	11月22日伊勢新聞 「三十年の布教を終へて覚眠師ロシアから帰る 近く四日市の自坊へ」
昭和7	1932	9月16日伊勢新聞 「青訓生、学生等の演習と慰霊祭、四日市々の満州事変記念事業十六日は記念講演会を開く」
昭和9	1934	4月9日伊勢新聞 「四日市諏訪公園の誓の御柱除幕式八日盛大に挙行さる 市民壇の竣工とともに」 10月24日伊勢新聞 「酒史諏訪神社で靖国神社遥拝式」
昭和10	1935	10月10日伊勢新聞 「天杯拝受の奉告法要 太田覚眠氏のために執行」
昭和11	1936	7月17日伊勢新聞 「太田覚眠師壮行会」
昭和12	1937	9月12日伊勢新聞 「金家宅の大激戦で壮烈な戦死を遂ぐ 四日市出身、横井伍長」 9月19日伊勢新聞 「ばたばた仆れる戦友の霊を慰めて仇討 前線勇士の陣中便り」 9月21日伊勢新聞 「再度志願し壮烈な戦死の村林伍長 三重村の”明朗技術員”」 10月1日伊勢新聞 「弟が仇を討つぞ 四日市阿野田一等兵の母」 11月13日伊勢新聞 「四日市の六勇士 遺骨近く無言の凱旋」 11月27日伊勢新聞 「決死の裸六勇士 四日市にもいた 港都の誉れ 鈴木君万歳」 12月9日伊勢新聞 「歳末の遺家族慰問 酒市軍人後援会で金一封贈る」 12月15日伊勢新聞 「お上からもお礼を 勇士の両親が酒署で嬉し泣き」
昭和13	1938	12月1日伊勢新聞 「酒市愛婦、国婦で行ふ、遺家族歳末慰問」 12月7日伊勢新聞 「酒市出身六勇士 厳粛な合同祭 一千余名参列の盛儀」
昭和14	1939	2月14日伊勢新聞 「酒市海蔵三分会 英霊法要追弔会」 2月26日伊勢新聞 「市内の神社巡拝 四日市川原町少年団」 7月1日伊勢新聞 「病床に叫ぶ”七生報国” 遺言を果す遺族の尊い献金 四日市喜田上等兵への感激」
昭和14	1939	8月10日伊勢新聞 「誉れの戦傷六勇士」 10月20日伊勢新聞 「戦没軍人遺品展 けふから四日市で開く」 10月22日伊勢新聞 「武勲語る遺品展 きふ四日市で蓋開け」 11月20日伊勢新聞 「銃後夫人が捧ぐ赤誠 酒市の興亜奉公記念碑愈よ着工 碑文は末次大將が揮毫」 11月20日伊勢新聞 「全員肉弾で突撃し十数台の戦車を破壊 壮烈！酒市出身服部伍長の最期」 12月18日伊勢新聞 「英霊の墓守二年余 毎土曜に花を手向けて冥福祈る 酒市第五の学童が捧ぐ真心」
昭和15	1940	2月15日伊勢新聞 「戦死の勇士巡查、部長に昇進 元四日市署勤務岡田上等兵」 2月18日伊勢新聞 「酒市専門店の将兵遺族慰安会」 5月26日伊勢新聞 「あすは海軍記念日 全国民一斉に正午一分間黙禱 四日市」 9月11日伊勢新聞 「海蔵校の奉安殿改築申出る」
昭和16	1941	9月17日伊勢新聞 「酒市の戦死者慰霊祭」

昭和17	1942	3月10日伊勢新聞 「遺家族扶助にも涙ぐましい活躍 三重郡四郷村郷軍分会」 9月18日伊勢新聞 「英霊室と興亜室 四日市第三校の精神教育」 10月24日伊勢新聞 「市葬時に市民黙祷 メートル制やキロ制を抹殺 けふ市民家族会議」 10月24日伊勢新聞 「泗市の招魂祭」
昭和18	1943	2月2日伊勢新聞 「四日市の忠霊塔 工費十萬円で建設本極り」 5月18日伊勢新聞 「通夜は英霊凱旋後 四日市市で遺族の苦痛を考慮」
昭和19	1944	5月17日伊勢新聞 「四日市の尚武会 発展的に解消」
昭和19	1944	10月22日伊勢新聞 「郷土の新祭神 四百十七柱 四日市市・三重郡」
昭和20	1945	11月28日伊勢新聞 「四日市三重郡で合同慰霊祭」
昭和22	1947	4月7日伊勢新聞 「病没連合軍将士の碑 石原産業四日市工場の建立 きょう建碑」 4月30日伊勢新聞 「県遺族互助連盟 四日市に支部」 7月4日伊勢新聞 「活動に乗出す 県遺族連盟四日市支部」
昭和22	1947	11月2日伊勢新聞 「盛大な四日市の戦災死没者追弔会」
昭和25	1950	4月25日伊勢新聞 「遺族年金など支払え 泗市に戦没遺族が県議会へ陳情」

あとがき

2009年晩秋、市内の戦争に関わる碑を調べ始めた。その時のメモには、次のように書いた。

忠魂碑について説明しなければならないことになり、市内の慰霊碑を調べ始めた。予想以上に多種類の碑が残されていることを知る。

忠魂碑は、戦時下、戦意高揚に利用されたことが知られているが、戦後は1953年以降、各地で「忠魂碑」などの慰霊碑の建設が盛んになる。市内で建立された多くの忠魂碑に混じって「平和之礎」碑が散見できる。「平和之礎」という表現は共通するものの、字体や揮毫者、建立時期はまちまちで、組織立った動きでは無さそう。戦争の記憶が未だ生々しかった時代、人びとは、慰霊に、どのような心を重ねたのだろうか。まずは、どのような碑が残っているのかを知るため各地をまわる。

大型台風が去った後、晴れた日が続いたので、この機会にと市内を北へ南へと自転車で走る。国土地理院2万5千分の1地図と住宅地図を組み合わせ、碑が在りそうな場所に当たりをつける。エリア内のできるだけ多くの碑を調べようと予定を組んだが、だんだん減入ってきた。

どうしてこんなに勇ましく大きいのだろう。忠魂、英霊、殉国といった言葉で飾られた碑を見上げると、晴れた空は眩しく、刻まれた名前は遠くて読めない。

1976年になって立てられたコミュニティセンター横の大きな忠魂碑を眺めながら、気持ちが萎え始めた頃、別の地域の寺で、「太平洋戦争における戦死者のため 真実之利」と刻まれた小さな慰霊碑を知る。1964年仲秋、有志の手で立てられた碑には、「すきな生ふ小さき塚かも鋤きのこす」（杉菜生ふ小さき塚かも鋤きのこす 田中七草）の句が添えられていた。碑の下には、虫鬼灯がやわらかな光を受けて美しい。

ああ、こういう慰霊のかたちもあつたのだと気づき、碑の調査計画を変更する。もっと時間をかけて、ゆっくり丁寧に回ろう。古い集落や共同墓地が、まだ昔日の姿を残しているうちに。

こうして、２００９年より、各地をまわって残された碑を調べ、当時の記録を探した。『四日市市史』編さん事業で作成された四日市関連記事の一覧から、戦争と死者に関わる記事を抜き出し、マイクロフィルムを閲覧できる図書館に通った。

そうこうしている間に１０年以上が経過したが、その間、地域の状況も少なからず変わっていった。あるべき場所に碑はなく、移設、改修、改築、移築されたり、すでに失われてしまったものも増えた。移設や改築にあたって説明を付した地域もあるが、来歴が全く判らなくなっているところもある。戦争の時代を知る人も少なくなった。おそらく、これから先の時代に、戦争と死を意識する機会など、ほとんどないのかもしれない。そして、それは戦後私たちがたどってきた「平和」の証なのだろう。

悉皆調査には程遠く、資料的に検証できたことも多くはないが、四日市の歴史に関心を抱く人や、戦争と死を通して「今」を考えようとする人に、この資料を届けることができれば嬉しい。

四日市市内 戦争と死者に関わる碑及び施設
(2023)

中 島 久 恵

2024年6月

発行 市民社会研究所

TEL/FAX 059-352-0010

Email ssk21ww@yahoo.co.jp

